

「トーマス、アクリナス」「ダンス、コータス」等其の著名なる學者なり。

### 二四 中古の間「アラビア」「サラセン文化」文化の有様如何

中古の間歐洲諸國、凡て暗夜の觀を呈したる間に「アラビア」人は獨り文化の光輝を放ち、學者の輩四方より輻輳し、學校、博物館を設け又廣大の文庫處々に起り、「カイロ」府にあるものは十萬卷の書籍を有し、西班牙にあるものは六十萬卷を藏せりと云ふ、理學、數學、天文、醫學は最も發達したり、歐洲に於ける大學の設立等は皆此の文化を受けたるものなり、初め「アラビア」人は粗暴過激の人民なりしが、夙に優美の風に向ひ、後に至りては「コルドバ」及び「バグダット」の兩「カリフ」は華麗を競ひ文學を争ひ、共に政治宗教の美を上下し、「バグダット」の如きは詩人學者の淵藪と稱せらるゝに至り、「コルドバ」の回教寺院及び「スルハン」アラ宮殿の遺蹟等、人をして當時の偉觀を

想像せしむるに足れり。

### 二五 中世期の著名の文學者二名を擧げよ

伊太利の「ダンテ」英國の「チヨースター」是なり。

## 近世史 總論

### 二六 歷史上近世史とは何時頃を指すか

第十五世紀の終り十六世紀の始めよりを指す。

### 二七 近世の世界をして、中古の世界と其の開明の點に於て月窟の差を生ぜしめたる主要の事情如何

十字軍の結果は、商業、冒險、征伐の精神を勃興せしめ、羅針盤の發明は航海をして安寧ならしめ、自由都府の勃興は、自由、商業、製造の中心となり、「コンスタンチノブル」の没落は、希臘學者をして歐洲諸國



に撒布せしめ、爲に歐洲の文化を一新せしめ、十四世紀の東洋に於て發明せられたる彈藥は戦争の方法を一變し、貴族割據の勢力を衰微せしめ、活字及び印刷術の發明は從來謄寫の勞を省き、書籍の刊行を多からしめ、大に人智の開發を催かせり、是即ち近世の世界をして、別天地の觀を呈するに至らしめたる主要の事項なりとす。

### 三五 「バスコダガマ」の喜望峯航路の發見と及び其の商業界に及ぼせる影響を問ふ

中古時代の終りに方りて歐洲特に「ポルトガル」人の交通往來せる所は、歐洲諸國、西南亞細亞、及び北亞弗利加の一部のみにして、東洋の物産は「アレキサンドリア」及び「ベネチア」を経て歐洲に渡來せしなり、然るに一四九五年「バスコダガマ」が亞弗利加の南端喜望峯を廻航して、印度に到るの航路を發見せしより、歐洲商業界の形勢俄

然一變して、東洋の商業權は葡萄牙人の手に移り、「リスボン」の港は「ベネチア」を壓して、印度物産の市場となるに至れり。

### 三五 新大陸の發見を略記せよ

伊太利人「コロンパス」なる者、地球は圓形なりとの説に依り四方より印度に至るべしと確信し、其の航海を企てむが爲に、諸國の王に遊説したれど容れられざりしが、最後に西班牙女王「イサベラ」の知る所となり、資金を獲て、船舶三隻を織し、一四九二年を以て出帆し、幾多の困難を重ねたる後、遂に新陸地を發見せり、今の西印度諸島これなり、蓋し其の新大陸なるを知らず印度の一部なりと考へたるなり、かくて後彼は二回の航海を企て、一四九八年を以て、米大陸「カリフォルニア」河口に到着せり。

「アメリカ」の名は「コロンパス」の後に、南米を探檢したる葡萄牙人



「アメリカ」の名に基けるなり、又「コロンブス」の以前歐人の新大陸に渡りたるものありと雖も交通絶えて消息傳はらざりしなりといふ。

### 二五三 「マゼラン」の事を記せ

航海、冒險、發見は當時最勇壯なる事なりとし競ふて之を試むるに至れり、葡萄牙人「マゼラン」なる者、一五二〇年本國を出帆し南米の南端海峽(今「マゼラン」海峽といふ)を廻つて太平洋に出て印度に行き、比律賓に至り不幸にして土人の殺す所となれり、而も船は尙進航を企て遂に喜望峯を廻りて翌年を以て歸國せり、此に於て地球の圓形説は始めて世人の承認する所となれり。

## 伊太利戦争

二五四 一四九四年佛人の伊國に侵入せしより、歐洲諸國に如何なる新組織を生じたるか

「ステートシステム」として數多の國々の連合を生じたり、其の目的とする所は、權力の平均を保ち、強國をして弱國を凌ぐ能はざらしむるにあり。

### 二五五 佛王「カロロ」第八世伊太利侵略の結果如何

「カロロ」第八世は、國內統一の業既に成り内顧の憂全く絶えたるを以て、「アレキサンドル」若くは「カロロ」大帝の大業を成さんと企て、先づ「ナポリ」王國に向つて之が君たるべき權ありと主張し、伊太利に侵入せり、「ミラン」、「フロレンツ」及び羅馬の三府は、皆城門を開きて款を通じ、「ナポリ」も亦之に下れり、是に於て「カロロ」は驕傲に陥り、宴樂に耽りしに、風潮忽ち一變し、「ミラノ」、「ベネチア」、「羅馬法王」、「日耳曼帝



「マキシミリアン」西班牙帝「ヘルザナンド」相合して一大連合を作り、以て佛人を伊太利外に逐ふに至れり。

### 三五六 佛王「フランソア」二世の伊太利侵略

「フランソア」二世も亦伊太利征服の功名を貪り、兵を發して「アルプス」山の險路を踰え、伊太利に侵入せり、此の時瑞西傭兵其の險路を守りしが、佛兵之を「マリガナノ」に破り、勢に乗じて「ミラノ」を撃ち、未だ干戈を交ふるに及ばずして「ミラノ」降を納れたり、尋て瑞西人も佛人と和し、爾來長く好を通ぜり。

### 「カロロ」五世時代

### 三五六 「カロロ」五世時代の二大事件は何ぞ

「カロロ」と「フランソア」との争、及び宗教改革の亂是なり。

### 三五六 「カロロ」と「フランソア」との争は何に依て起りしか

西班牙王「カロロ」第五世は日耳曼帝「マキシミリアン」の孫にして祖母は西班牙の女王「イサベラ」なり、故に「マキシミリアン」歿して嗣なきに及び、撰ばれて日耳曼帝の位に上れり、時に一五一九年なり、されば其の領土は獨、西、伊等に及び、歐洲中最大たり、始め日耳曼帝の歿するや、佛王「フランソア」も亦其帝位を希望したりしに、「カロロ」の爲に其の事を破られしかば、大に之を憤り、爾後讎敵の念甚しく、兩王の争によりて歐洲は血を漲らすの變を生ぜり。

### 三五六 兩王の争に關し英王「ヘンリー」の關係如何

此の時に方りて英國の好意を得るとは兩王の爲に得策なるが故に、「フランソア」は「カレー」の地に於て英王と會し、盛大の儀式を張りて之を祝し、「カロロ」も亦「ヘンリー」と會し、美言を以て其の心を收め、



且其の宰相「カルザナル、ウルシー」をして、望を「カロロ」に屬せしめたり、是を以て英王は「カロロ」に與みし法王と共に連合して「フランソア」に抵抗するの準備をなせり。

二六〇 「バビヤ」の會戰を記せ

一五二五年伊太利「バビヤ」の地に於て、佛王の軍、日耳曼軍と會戰せり、時に「アルボン」公、日耳曼軍を指揮して、大に佛軍を破り、佛の貴族等多く之に死し、瑞西の傭兵も亦兵を曳て遁走せり、是に於て「フランソア」は八面より敵の攻圍を受け、終に進退谷まりて降を乞ひ、「マドリッド」の牢獄に投ぜられたり。

二六一 「フランソア」の國に歸りたる所以及び歸國後の處置如何

「フランソア」國の内にありて其の健康を害するに及び、「カロロ」は

「フランソア」の死して利益の己に歸せざらんことを恐れ、其の二子を質となさしめて、「フランソア」を救し、且約して曰く、「アルゴニウ」を日耳曼に與へ、將來伊太利に向つて其の權利を主張するを止めよと、「フランソア」之を諾せしが、歸國の後直に其の約を破り、日耳曼人を伊太利以外に放逐せんと企てたり。

二六二 「カロロ」が伊太利に於て成功有りしにも拘はらず、「フランソア」と和せしは何故なるか

是より先き土耳其人の勢盛にして、既に東羅馬を亡し四隣を略し、「ソリマン」のときに至りては、「ロウアス」島を取り、埃及を征服し、「ハンガリー」を侵し、進みて「ヴァイン」の城下に其の新月旗を懸へすに至れり、故に「カロロ」は佛軍と戦つて屢々勝利を得しにも拘はらず、夫人の中裁に同意して一旦和議を結ぶに至りしなり。



二六三 「フランスア」「ソリマン」の連合

「フランスア」は日耳曼帝に向つて復讐の念盛なるが故に「ソリマン」の勢盛にして且奧太利に反對の地位に立つを見て、之と連合するの已に利なるを信じ、其の宗教の異なるにも拘はらず、之と同盟を結びたり、是に於て「ソリマン」又軍を發し、「ホンガリア」を超えて「ヴァーン」に至りしが、日耳曼の剛將猛士大に「カロロ」の旗下に集まり、防戦其の宜きを得たるを以て、土耳其人は其志を得ず、怏々として其の國に るに至れり。

二六四 「カロロ」五世の「チュニス」征伐を記せ

「カロロ」は既に陸上に於て土耳其人の銳鋒を挫きたりと雖、尙ほ水上に於て土耳其の勢力を弱めんと欲し、即ち地中海を渡りて土耳其艦隊依據の地たる「チュニス」(亞弗利加にあり)を襲ひ、激戦數回に

及べり、會「チュニス」城中に奴隸の役に服したる一萬の歐洲人、齊しく起ちて叛亂を起し、かば、城遂に陥り土耳其艦隊の大根據地是に於て亡び、一萬の奴隸赦されて其の國に歸れり、之を「チュニス」征伐と云ふ。

二六五 「カロロ」五世が亞弗利加に第二遠征を試み、不利にして歸りしとき、「フランスア」の計略及び結果如何

「フランスア」は此の機に乗じて五箇の大軍を發して「カロロ」の國を襲へり、同時に「ソリマン」は「ホンガリア」を侵し、「バルパロツサ」は西班牙、伊太利の海岸を暴掠せり、是に於てか回教徒の兵威今や耶蘇國を震恐し、其の領地地中海邊に周からんとするの勢あり、是に於て英王「ヘンリー」又「カロロ」と同盟して「フランスア」に當り、「パリ」に迫りしかば、「パリ」人大に恐れ、「グレスビー」の條約を結びて和を講じ、西班



牙佛蘭西の葛藤一旦其の局を結ぶに至れり、時に一五四四年なり。

### 二六 宗教改革の亂源如何

第十六世紀の頃より人心漸く羅馬法王を信ぜず、且其の教理儀式等、聖經の本旨に背きたるもの多きを疑ふに至り、加ふるに僧侶の輩不學無術にして邪曲の心を有し、寺領の租税を征取すること嚴酷に流れたれば、民心漸く離反し、處々に異説を唱ふるものを生ずるに至れり、殊に一一五七年「ドミニカン」の一兇僧が赦罪の特許を販賣せしが如きは、一般人民の忿怒を激せり、是に於てか「ウィツテンベルヒ」大學の講師「マルチン・ルーテル」、此の機に乗じて宗教改革の意見を發表し、赦罪の特許を販賣するは聖經の本旨に反し、法王の之を爲すは聖旨を知らざるものなりとせり、日耳曼の貴族等陰に「ルーテル」に心を傾くるものありしに、法王之を意に介せず、「ルー

テル」を破門の罰に處せり、「ルーテル」は法王の宣告書を取りて公然之を燒棄し、法王に抵抗するの決意を示せり、其の云ふ所は僧侶は國家の權力に服すべく、獨立の國家的教會を起すべし等なり、(一五二〇年)是に於て「サクソン」侯及び學者「メランヒトン」大に「ルーテル」を助け、須臾にして日耳曼全國の搔擾を生じたり、是即ち宗教改革の亂初たり、「ルーテル」が説けるものを新教と稱す。

### 二六七 「ウオルムス」の會議を記せ

法王は「カロロ」と結んで「ルーテル」を壓せんと欲し、紀元一五二一年、日耳曼帝「カロロ」と「ウオルムス」の會議を開き、「ルーテル」を召して其の異端を唱ふる理由を辯解せしめたり、或人「ルーテル」の身を危み、其の出席を諫めしに、「ルーテル」は意を決して會場に臨み、帝王貴族高僧等の面前に於て聲を勵して曰く、良心の命する所に從て進退



するは智者の事なり、正士の行なり、我は斷乎として吾が説を持すと稱し、「ローマ」教會を非難せり、此の時「カロロ」は「ルーテル」に害を加へずして、却て護衛兵を給し其の家に歸らしめたりと雖、「ルーテル」の黨は帝國禁令の下に置かれたり。

二六 「ウオルムス」會議以後「ルーテル」黨の勢を得たる事情如何

「カロロ」は此の會議の後日耳曼を去り「フランソア」と戦争の爲め九年の間日耳曼を顧みること能はざりき、此の間に「ルーテル」は益々日耳曼に勢力を得て、數多の侯伯靡然として其の説に同意し、佛蘭西、瑞西、英倫、蘇格蘭、唎馬、那威、瑞典の諸國皆「ルーテル」の影響を被むり、羅馬教に背き、法王の權力に抵抗するもの益々盛にして、「ルーテル」の聲援益々多きに至れり。

二九 法王と「カロロ」五世との衝突を問ふ

獨佛は長く恨を結べり、「ルイ」十二世の朝には「ナポリ」を得むとして失敗し、「フランソア」二世の時に至りては「カロロ」の威勢を羨がんと欲して遂に干戈を交へたり、中頃となりては「ミラノ」(「ミラン」)にして、佛國破れたり、斯くの如く「カロロ」五世の勢力旺盛なるや、法王は漸く彼れを忌み、今迄は「カロロ」に左袒したれども、翻つて佛國と結託したれば、佛國は再び獨軍と戦へり、此の時「カロロ」は伊太利に突進して「ローマ」を襲ひたり、而して法王勝たず和を請ひ、一五二九年を以て「ベロンナ」に於て帝冠及び王冠を「カロロ」に授けたり、「カロロ」は此の間「ルーテル」一派に對しては政畧上表面寛大なる處置をとれり。

二七〇 「スパイエル」の會議とは何ぞや



「カロロ」五世の法王と和を講ずるや、其の本意を表はし再び「ルーテル」一派を壓迫せんと欲して「スバイエル」の會議を開き、(一五二九年)未だ「ルーテル」説の侵入せざる地方には其の説を傳ふるを禁ぜり、此の時「ルーテル」一派大に怒りて辯論せり、これより此の一派を「プロテスタント(新教)」といふ、嚴格に辯證するの義なり。

### 二七一 「アウグスブルグ」會議の始末

「カロロ」は佛と和して再び日耳曼に至り「アウグスブルグ」の會議を開けり、新教徒は此の會議に於て日耳曼改革者の趣意書を公讀せり、先に「ウォルムス」の會議に於ては獨り「ルーテル」の帝に抗するのみなりしが、今や日耳曼の貴族半は羅馬教に背きたるを以て「カロロ」大に驚き斷然として新教を排斥して其の禁令を發布せり(一五三〇年)。

### 二七二 新教徒と「カロロ」と一時相和したる所以如何

「カロロ」が新教排斥の令を布くに及び、新教の貴族等相互に保護せんがために一連合を作りしか、會、土耳其古の「サルタン」「ヴァイーン」城を攻め危急に迫りしかば「カロロ」は新教徒に向つて信仰の自由を與へ、其の歡心を買ふて共に力を合せて敵に當り、遂に之を退くることとなれり、(一五三二年)之を「マールンベルヒ」の和議といふ。

### 二七三 「クレスピー」の條約以後「カロロ」の盛衰如何

「クレスピー」の條約によりて「カロロ」は「フランソア」の憂絶えしかば心を決して再び新教徒の征服に従事せり、戦争の始め「サクソン」侯、新教を棄て、「カロロ」を助けしかば、新教連合忽ち破れ、其の威權甚だ盛にして日耳曼全國皆之に屈服するに至れり、之を「カロロ」の盛時となす、之より「カロロ」は暴慢に流れしかば、新教徒は勿論、舊教徒



も之を恨むものあり、會「サクソン」侯先非を悔ひて反旗を翻へし、佛國の「ヘンリー」と同盟し、諸州を略取せしかば、「カロロ」意を屈して新教徒に容忍を與へ新舊兩教徒に同一の權を與ふるに至れり、(一五五五年)是「カロロ」の衰運に向ひたるときなりとす、之より「カロロ」は百事意の如くならず、殊に法王は新教徒に容忍を與へたるを憤り、佛と同盟して「カロロ」に當りしかば、「カロロ」は失望の餘り一五五六年帝冠を棄つるに至れり。

### 二七 瑞西國の宗教界を問ふ

瑞西國人は、久しく法王に屬せるを以て、其の宗教界亦腐敗したり「ルーテル」に殆同説なる「ツウイングリー」なる者、奮然起つて、政治上及び宗教上の改革を唱へ各所に改革の氣焰揚りぬ、然れども「ツウイングリー」は「カッセル」の戰に討死したりしかば、(一五三二年)新教

の勢衰へ、舊教亦銷沈せり。

### 二七 瑞典、諾威、丁抹の宗教改革を問ふ

瑞典國民は永く僧侶及び貴族の壓制に苦みけるが、一五二三年を以て「グスタフ・フアーズ」を推して王とし、稍平安を得たり、王、僧侶及び貴族の勢力を削らむが爲に新教を奉じたり、諾威及び丁抹も亦僧侶の專横に苦みしが故に、國王貴族等相結んで改革派を助け遂に一五三六年の「コペンハーゲン」會議を以て、新教を國教と定めたり、時の國王を「クリスチアン」三世とす。

## 和蘭共和國の勃興

### 二七 和蘭「ベルギー」の古名を何と云ふか

「ネーデルラント」と云ふ、低地の義なり。



二七 「カロロ」五世の位を去るに及びて、「ネーデルランド」は何れの版圖に入りしか

西班牙の版圖に入りたり。

二八 當時「ネーデルランド」の國勢如何

此の地の人民は勤勞と才智とを以て繁榮の域に達し、航海の術製造の業に於て其の名歐洲に冠たり、其の港灣には千百の帆檣常に林立し、其の市場には商賈常に輻輳し、殆んど世界の貿易を左右するの力を有せり。

二九 西班牙王「フィリポ」第二世が大に「ネーデルランド」人を苦むるに至りたる所以如何

此の頃「ネーデルランド」には新教大に蔓延せしが「フィリポ」は大に之を惡み、誓つて之を殄滅せんと欲し、嘗て人に語りて曰く、余は治

下に異教の徒を有せんよりは、寧ろ之が王たらざるを欲すと、是に於て「アルバ」公をして西班牙の兵を率ゐて「ネーデルランド」に向はしめたり、「アルバ」公は殘忍なる手段を以て新教徒を苦め、六ヶ月の間に死刑に處したるもの一萬八千人の多きに及びり。

三〇 此の時「レンジ」侯「ウイレルム」は如何なることをなしか

「アルバ」公が其の暴威を振つて「ネーデルランド」を苦むるに及び、「ウイレルム」は其の人民の塗炭の苦を救はんと欲し、日耳曼より兵を擧げて「ネーデルランド」に入り、英の後援を得て西班牙兵に抗敵し、一五七六年其の諸州を糾合して「ゲント」同盟を作り、其の分裂に及び、「ウイトレヒト」同盟を作り、和蘭共和國の基礎を立てたり。

三一 「ウイレルム」の死後、和蘭人は如何にせしか



「ヴァイルレム」が「フィリップス」の刺客の爲に殺さるゝや、和蘭人は生存中の恩恵に報ゆるために、其の子「モーリス」を迎へて頭領となせり、「モーリス」僅に十七歳なりしと雖、西班牙との戦争に於て屢、剛勇を顯はし、國勢益隆盛を致し、英佛の兩國も亦兵を出して和蘭を助くるに至り、一六〇九年、西班牙王「フィリップス」第三世、到底和蘭の征服し難きを見て休戦の約を結ぶに至り、後「ウエストファリア」の條約によりて公然獨立を認可せられたり。

### 佛國の内亂

#### 二六二 「カルピンの」事蹟を略述せよ

「カルピン」は佛國の宗教改革派の泰斗なり、元來佛國は王を始め上流社會並に巴里大學等、皆舊教を奉じて改革派を壓したるが故に、

新教徒は多く瑞西に遁れ、「カルピン」亦同國に難を避け、附近の混亂に乗じて新教國を立てたり（一五三六年）かくて「ジュネハ」地方の政權を掌握し寺院制度を組織したり、「カルピン」の説は「ルーテル」に似て稍過激にして而も多く文筆に依りて意見を發表したるが故に、勢力大に廣く、瑞西、英吉利、「ネーデルラント」等に其の信徒多く、亦佛國內には、彼れの主義に依れる「ユグノー」派生ぜり。

#### 二六三 宗教改革の精神佛蘭西に入りて如何なる變を生じたるか

宗教改革の精神佛國に盛なるに及び、「フランソア」第一世「ヘンリー」第二世は、暴力を以て之を壓服せんと欲し、嚴刑酷罰以て改革黨を待つと雖、其の蔓延益々甚しく、王宮の内にありてすら其の禱詞賛歌を聞くに至れり、「ユグノー」人は信教の自由を得んと欲して之を要



求せしに、忽ち當路者の拒絶する所となり、憤怒の餘り終に叛亂を企圖するに及び、加ふるに「ブルボン」家、「ギース」家の政治上に勝を制せんとするの志と、宗教上に相容れざるの心と相合し、内訌を生じたるを以て、佛國は「ヘンリー」第二世より「ヘンリー」第三世の間擾亂常に絶えざりき。

### 二六四 舊教の首領及び後援者

舊教の首領は「カタリナ」「モン・モーレンシー」及び「ギース」兄弟にして、後援をなすものは羅馬法王及び西班牙なり。

### 二六五 新教の首領及び後援者

新教の首領は「ナバラ」王、「コンテ」公、及び「コリニー」にして、之を助くるものは日耳曼、英倫、「ネーデルラント」の改革黨なり。

### 二六六 「カタリナ」が舊教を助けて新教に敵したる所以如何

佛國宗教改革の争亂は單に宗教上の争亂にあらずして、政治上の争亂之に合したるを以て大争亂を生じたるものなるが、殊に「カタリナ」の如きは、宗教の異同に依りて向背を決したるにあらずして、「コクノー」人を憎めるが故に其の反對者なる舊教徒に與みし、新教徒に當りたるものなり、奇怪なる宗教争亂と云ふべし。

### 二六七 「ギース」兄弟と「ブルボン」家との争如何

佛王「フランソア」第二世、性來多病且つ年尙弱冠に滿たずして、内は其の后「メリー」に制せられ、外は「ギース」兄弟の支配を受けたり、故に「ブルボン」家は其の王族なるにも拘はらず、毫も朝廷の上に勢力を有せざりしかば、憤怨嫉妬の念に堪へず、竊に「ギース」兄弟を除かんと謀りしに、「ギース」兄弟之を探知し、大に復讐の舉動に及び、「ブルボン」家は之が爲めに殆んど殄滅せられんとせしに、會「フランソア」王



の卒去によりて、辛うして其の禍を免れたり。

### 二六 「カロロ」第九世が「ユグノー」人を虐殺したる顛末を略説せよ

「カロロ」第九世は「サンセルマン」の條約に依りて、一時戦禍を定めしが、尙其の平和を固めんが爲に、皇妹「マーガレット」を以て「ナバラ」王「ヘンリー」(新教徒)に嫁せり。「ユグノー」人大に之を喜べり、此の際、「コリニユ」(新教徒)大に「カロロ」の信用を得て、新教徒の勢力益々盛となり、遂に王軍を發して「ネーデルランド」の改革黨を援くるに至れり、故に舊教徒たる「カタリナ」は、其の權力の次第に衰微すべきを憂ひ、「コリニユ」を暗殺せんと企てたり、然るに其の陰謀忽ち發覺して、新教徒の「カタリナ」を憎むもの夥しく、誓つて復讐の舉に出でんとせしかば、「カタリナ」は猛烈の手段によりて一撃の下に、「ユグノー」黨を塵殺

せんと欲し、「カロロ」に勧めて之に同意せしめ、一五七二年八月二四日未明、一聲の號鐘と共に劍戟を携へて、「ユグノー」人を襲ひ、三日の間殺戮を恣にし、四万五千の新教徒は殺されたり、而して「コリニユ」爲に死し、「ヘンリー」も其の命を危くせり。

### 二六九 「ヘンリー」第四世の即位、政策、治世を略叙すべし

「ヘンリー」三世死して其の王統絶ゆるに及び、一五八九年「ナバラ」王「ヘンリー」佛國の王位に即く、是れ「アルボン」王統の始なり、「ヘンリー」第四世は新教徒なるが故に、舊教徒之を戴くを肯んぜず、戦争従つて絶えざりしかば、「ヘンリー」四世は羅馬教徒となりて敵人の心を和らげ、後一五九八年に至りて新教の禁を弛べ、舊教と並び行はれて互に害せざらしめたり、之を「ナント」の勅令といふ、是に至りて内亂全く絶え、國家安寧、商工業等盛に起り、又到る所に學校の設け



あらざるなきに至れり、故に人民皆王を敬愛して之を父母に比せりと云ふ、而して聖明なる此の王は不幸一兇漢の爲に天壽を短くせり。

### 英倫「チユウドル」王統

二九〇 第十六世紀に於て英國の王統及び其の時代の著名なる事件は何ぞ

第十六世紀に於て英國を支配せし王統は「チウドル」王統なり、此の時代の著名なる事件は新教の勃興、商業の繁盛に赴きしこと、文學の隆運に向ひたることはなり。

二九一 「ヘンリー」七世の性行を略叙せよ

「ヘンリー」七世の性行は兎角貪婪なりき、嘗て佛國を撃つを名とし

て國會より軍資を支三せしめ、尙又富者に強ひて數多の金銀を獻せしめたるにも拘はらず、未だ一戦にも及ばず、十四萬九千磅の爲に「カロロ」第八世と和議を結びて、内外より富を博取したるが如き其の一例なり、且王は種々の口實を設けて貴族に罰金を課したること其の數を知らず、然れども「ヘンリー」の虐する所は貴族富豪の輩にして、平民に至りては能く之を愛し之を扶けて、毫も害を加ふることなく、力を通商貿易の事業に盡したること尠からざりしと云ふ。

二九二 「トマス・ウルシー」の略歴を擧げよ

「ウルシー」は「ヘンリー」第八世在位の間有名の宰相なり、元來屠者の子にして、一僧侶の資格を有するに過ぎざりしが、博學多識にして夙に「ヘンリー」の值遇を受け、遂に王の首相となるに至れり、威權蕭



赫到る所名門高位の輩より鄭重なる敬禮を受けたりとぞ、然るに「ヘンリー」が、其の后「カザリン」を離婚せんとするに及び「サルシー」は只法王の意を冀ひ、「ヘンリー」の爲に力を盡さざりしを以て其の官職を剝奪せられ、尋いで叛逆の罪によりて捕縛せられしかば、激しく心痛を起し、牢獄に送らるゝ途中に於て命を終れり。

二九三 「ヘンリー」第八世の、新教及び羅馬法王に對する關係如何

「ヘンリー」第八世は深く新教を忌み、嘗て一書を著はして「ルーテル」の教理を駁撃せり、故に法王之を嘉みして、王に宗教保護者の稱號を與へたり、然るに皇后「カザリン」の離婚を法王に請ふに及び、法王は「カザリン」の伯父なる「カロロ」五世の怒を畏れて遲疑之を決せざりしかば、一己の意を以て「カザリン」の從者たりし「アーン」を迎へ法

王との交誼は破れたり、尋ぎて「クロンウエル」首相たるに及び、王に勸めて法王の主權を排斥せしめたり、是に於て國會は布告を發して曰く、英王は英國教會の首長なりと、是より法王との關係絶えたり。

二九四 「エリザベス」女王の治世を略評せよ

「ヘンリー」八世の嗣「エドワード」王夭折して「ヘンリー」八世の女「メリ」即位し其の崩後其の妹「エリザベス」王位につけり、「エリザベス」は英明の君にして善く萬機を處理し、加ふるに「ロルド」、「マーレル」、「フラ」ンシス、「ソルシングハム」等の良相ありて之を補佐せしかば、國富み兵強く、英倫は歐洲中優等の地位を占むるに至り、人民は皆當時の支配に満足したり。

二九五 「エリザベス」の宗教に對する處置如何



「エリザベス」は新教を取りて國教となし、尋て二條の法命を發布せり、其の一は「エリザベス」を以て英國教會の首長となすものにして、其の二は國教を以て人民の必ず信奉すべきものと爲せるものなり、政府は此の布令を施行するに方りて、嚴酷の手段を用ゐしかば、數多の舊教徒は爲に其の生命を失ひ、「ピューリタン」宗徒亦多く刑に處せられたり、「エリザベス」は既に新教を國內に設立したるを以て、更に進みて大陸の新教徒を保護せんと企てたり。

### 二九六 「ネーデルラント」の新教徒を保護したる顛末如何

西班牙王「フィリポ」は、嚴刑を用ゐて「ネーデルラント」の新教徒を壓抑せんと企て、是に激烈なる争亂を生じたり、「エリザベス」即ち其の新教徒を保護せんと欲し、兵を送りて西班牙軍に抗し、且つ英の船舶は海上にありて屢々、西班牙の貿易を妨げしかば、「フィリポ」は大に水軍

を起し、一五八八年、一百四十艘の所謂不滅艦隊を以て英國に近けり、是に於て英の艦隊須臾に輻輳し、激戦七日遂に大に之を破り、以後英國は海上に主權を握り、和蘭「ネーデルラント」の内は其の獨立を固うし、西班牙は漸く衰運に向へり。

### 二九七 「エリザベス」時代の航海業如何

「エリザベス」の時代には遠洋航海の事業も大に開け、或は海賊となり、或は搜索者となり、其の踪跡到る處に普れし、就中「フルビツシヤ」は北海の航路を探檢し、「ドレーク」は世界を周航して路に西班牙船を掠め、「ホーキンス」は「ギニヤ」海岸を探檢し、「サー、チャーター、ラレー」は太西洋を超えて、「バーザニア」に殖民地を立て、一六〇〇年には東印度會社起りて利を東方印度に搜り、英領印度の基礎を開けり。



「エリザベス」は新教を取りて國教となし、尋て二條の法令を發布せり、其の一は「エリザベス」を以て英國教會の首長となすものにして、其の二は國教を以て人民の必ず信奉すべきものと爲せるものなり、政府は此の布令を施行するに方りて、嚴酷の手段を用ひしかば、數多の舊教徒は爲に其の生命を失ひ、「ピューリタン」宗徒亦多く刑に處せられたり、「エリザベス」は既に新教を國內に設立したるを以て、更に進みて大陸の新教徒を保護せんと企てたり。

### 二九六 「ネーデルランド」の新教徒を保護したる顛末如何

西班牙王「フィリッポ」は、嚴刑を用ひて「ネーデルランド」の新教徒を壓抑せんと企て、是に激烈なる争亂を生じたり、「エリザベス」即ち其の新教徒を保護せんと欲し、兵を送りて西班牙軍に抗し、且つ英の船舶は海上にありて屢々、西班牙の貿易を妨げしかば、「フィリッポ」は大に水軍

を起し、一五八八年、一百四十艘の所謂不滅艦隊を以て英國に近けり、是に於て英の艦隊須臾に輻輳し、激戦七日遂に大に之を破り、以後英國は海上に主權を握り、和蘭「ネーデルランド」の内は其の獨立を固うし、西班牙は漸く衰運に向へり。

### 二九七 「エリザベス」時代の航海業如何

「エリザベス」の時代には遠洋航海の事業も大に開け、或は海賊となり、或は搜索者となり、其の踪跡到る處に普れし、就中「フルビツシヤ」は北海の航路を探検し、「ドレーク」は世界を周航して路に西班牙船を掠め、「ホーキンス」は「ギニヤ」海岸を探検し、「サー、チーター、ラレー」は大西洋を超えて、「バリーガニア」に殖民地を立て、一六〇〇年には東印度會社起りて利を東方印度に搜り、英領印度の基礎を開けり。



### 三十年戦争

二九六 三十年戦争始終の年限、戰場、關係國を擧げよ

三十年戦争は一六一八年に始まり一六四八年に終る、此の時に當りて日耳曼は戦争の中心となり、歐洲諸國之に關係せり。

二九七 此の戦争の主要の原因如何

原因の主要なるもの三つあり、(一)宗教上の憎怨國內に鬱積し、「ポヘミヤ」の亂に依りて潰裂したること、(二)新教の徒、數多の寺領を押奪し、舊教徒の之を回復せんとして其の權利を主張するより、互に隙を生じたること、(三)日耳曼帝「ヘルザナンド」が西班牙の力を藉りて、日耳曼全國をして宗教、政治皆其の命を聽くに至らしめんとしたること是なり。

三〇〇 「ポヘミヤ」戦争の破裂、決着如何

「ポヘミヤ」の地は「ヘルザナンド」の領國なりしが、新教の禁極めて嚴なるを以て、一六一八年人民叛旗を翻して「ブレイク」の王宮に闖入し、其の憎む所の關員二名を窓外に抛ち、大に舊教徒と戦ひたり、既にして「ヘルザナンド」が日耳曼の帝位に登るに及び、「ポヘミヤ」人は選舉侯の一人なる「フリードリヒ」を迎へて王となし、國亂漸く大となりしが、「フリードリヒ」の軍遂に大敗して、「ポヘミヤ」の地より驅逐せられ、併せて舊來所有の國土をも失ひ、貧苦艱難の間に其命を終るに至れり。

三〇一 「ポヘミヤ」の征服以後、「ヘルザナンド」の勢力如何

「ポヘミヤ」の征服以來、「ヘルザナンド」は漸く暴慢の舉動に及びしかば、叛者相踵ぎ日耳曼諸州大抵干戈の聲を聞かざるなきに至れり、



然れども帝の勢力強大にして、新教徒は殆んど全く壓倒せられんとするに方り、唵馬國、クリスチャン第四世、新教徒を救はんと欲し、兵を率ゐて日耳曼に入る、日耳曼の大將「ワレンスタイン」善く戦ひ、唵馬兵之に抗する能はず、「クリスチャン」敗北して其の國に歸り、一六二九年遂に和を請ふに至れり。

三〇二 「ヘルヂナンド」が唵馬人を破り、旭日の勢あるに當り、如何なる障害事件を生じたりしか

此の時に當りて「ヘルヂナンド」の銳鋒を挫き、日耳曼内に縱横して新教を助けたるものを瑞典王「グスタス、アドルフ」となす、「グスタス」一六三〇年新教の保護者として日耳曼に上陸す、佛國の「リシウリウ」條約を結びて軍資を「グスタス」に支給し、英國よりも其の旗下に集まりたるもの數千に及びければ、「グスタス」の勢益々強盛を致せり、

殊に日耳曼にては名將「ワレン、スタイン」譚を蒙りて職を罷められたるの際なれば、毎戰「グスタス」の勝利に歸し、日耳曼全國今や「グスタス」の爲に左右せらるゝに至れり。

三〇三 「リッツェン」の戰爭

「リッツェン」の戰爭は實に一六三二年十一月十六日にあり、此の日「グスタス」は自ら馬を陣頭に進めて激戰三回に及び、亂軍の中にて彈丸に貫かれて斃れたれども、「ウエヰン」侯「ベルナード」代りて善く軍を指揮せしかば、大に日耳曼軍を破るに至れり。

三〇四 三十年戰爭の後半戰爭の性質を記せ

三十年戰爭の前半は、瑞典人が日耳曼の新教徒を助けて「ヘルヂナンド」に當りたるものなれば、新舊兩教の戰爭なりと云ふべきなり、然るに後半の戰爭には、日耳曼の新教を奉じたる諸國が往々醜つ



て「ヘルザナンド」と條約を結びたるのみならず、瑞典人は佛人と力を合せて日耳曼の土地を蠶食せんとて日耳曼と戦ふに至りたれば、今や宗教の戦争に非ずして土地侵略の戦争となれり、是れ戦争の前後に於て大に其性質を異にする所なり。

### 三〇五 「ウエストファリア」の條約とは如何

三十年戦争の終に當り、日耳曼軍頼りに利を失ひ、「バワリヤ」「ボヘミヤ」「プルーク」等、相次て佛人の手に歸し、「ライーン」の都も爲に震懼するに至りしかば、「ヘルザナンド」は已むを得ず（一六四八年）「ウエストファリア」に和議を結び、三十年戦争の局を結び、即ち其の條約に依りて

- 第一 瑞西、和蘭は公然列國の間に獨立國として認定せられ
- 第二 日耳曼國內の新舊兩教徒は同等の位地に立ち

### 第三 佛國も「カルビン」派に信教の自由を與へ

第四 日耳曼は「メッツ」「トゥール」「フェルゼン」「アルサス」「ストラスブルク」を佛蘭西に、「西バンメルン」「ステラチン」「ブレメン」を瑞典に割讓せり。

### 三〇六 三十年戦争は日耳曼に如何なる影響を及したるか

三十年戦争は國內の新舊兩教の鬭争が其の源にして、外國の干渉之に乗じたるものなれば、國內一致結合の精神之が爲に地を掃ひ、三百小邦各獨立して其の朝廷を有し、日耳曼皇帝の稱號は全く虛名と爲るに至り、且多年の戦争に依りて人口の三分の二を減じ、貿易製造文學等悉く萎靡不振の狀に陥り、大なる災害を日耳曼に及したり。



### 第十七世紀の佛國

三〇七 「ルイ」第十三世親政の時登用したる英才は誰か

「カルザナルド、リシッリッ」なり、氏が内閣に入りしより政權全く其の手に歸し、「ルイ」王は佛國にて第二等の地位に下りたりと雖、佛國は歐洲諸國に對して第一等の地位を占むるに至れり。

三〇八 「リシッリッ」施政の三大目的を擧げて其の實行を略叙せよ

名宰相「リシッリッ」施政の第一目的は新教徒の結黨を解散するに在り、故に氏は「ロツシエル」府の港口に石壁を築きて英國艦隊の入津を妨げ、終に新教徒の中心たる「ロツシエル」府を陥れしかば、新教徒の結黨従つて解散し、同時に信教自由令を發したるを以て内亂頓

に鎮定せり、氏の第二目的は貴族の横恣を壓服するにあり、故に氏は奮つて封建の城壁を破壊し、貴族をして「パリ」に來住せしめ、以て地方割據の害を除けり、氏は此の政策の爲に貴族の怒を招き、其の位を失はんとしたれども、毎に之を探知して其の巨魁を討せしかば、貴族の勢全く地に墜ち、國會も其の能力を失ひ、佛國は純然たる專制國となれり、氏が第三の目的は墮地利家の勢力を削るにあり、故に氏は三十年戦争の間、新教徒に助を與へ、以て日耳曼及び西班牙に於ける墮地利家の勢力を殺ぎ、佛國をして歐洲諸國に雄視せしむるに至れり、氏は以上の三大目的を悉く貫徹したるとき忽然長逝せり、于時一六四二年なり、彼の世に「ガゼット」新聞は生れたり。

三〇九 「マザレン」の事蹟を記せ

「マザレン」は佛王「ルイ」十四世の幼冲の時の宰相にして、もと伊太利



人なり、「リシャリヤ」の歿後、よく其の政略を繼承し、三十年戦争に干渉して、「ウェストファリア」の媾和に於て、佛蘭西の國境を弘め、功績頗る見るべきもの多し、又理財家「コルベール」を推擧し、内財政を整へ、外貿易の振張を計れり。

三〇「ルイ」第十四世のとき佛蘭西の國勢及び其の汚點如何

「ルイ」十四世銳敏にして政務に通じ、人を知りて善く任ぜしかば、當時佛國の勢日に強盛に赴き、數百の堡砲は四境に峙ち、數百の軍艦は「ツローロン」「プレスト」「ハブル」等の諸港に出入し、十四萬の陸軍は一號令の下に立るに戰場に向ふべく、以て其の國勢の盛なるを知るべし、然るに其の一大汚點を貽したるものは新教徒を虐待せしにあり、一六八五年「ロボア」等の勅めに従つて「ナント」令を廢止する

や、新教の徒或は刑罰を蒙り、これが爲に良工名手の外國に脱したるもの二十萬人に及べり、故に從來佛國専有の技術を外國に輸出するに至れり、是れ實に當代の一大汚點なりとす。

三一「ルイ」第十四世が自己の功名心を満足せしめんがために企てたる四大戰を擧げよ

(一)「フランドル」戰爭、(二)和蘭戰爭、(三)「バラチン」戰爭、(四)西班牙王位繼承戰爭是なり。

三二「フランドル」戰爭とは如何

西班牙王「フィリポ」第四世の歿するや、佛王「ルイ」は己が皇后「マリヤ、テレンサ」が「フィリポ」の女として西班牙の領地「フランドル」に權利を有すと主張し、兵を率ゐて其の他を襲ひしに、英國和蘭及び瑞典の三國同盟して佛國に當りしかば、佛王已むを得ず、其の侵地の大半



を復舊して「エラシヤヘル」の條約を結べり。

### 三三 和蘭戰爭を畧記せよ

和蘭は久しく佛の與國たりしに、「フランドル」の戰爭に於て西班牙を助けしかば、佛王大に怒り、先づ英國及び瑞典に賄賂を贈りて、和蘭と同盟を絶たしめ、兵を率ゐて和蘭を襲へり、和蘭の大統領「オレンジ」侯「ウイリヤム」日耳曼、西班牙「ブランデンブルグ」侯等の援兵を得て、勇を鼓して之に當りたり、佛國は長く戦ふの不利を覺り、稍勝利を得たるを機とし、「ニメゲン」の條約を結び和を成せり。

### 三四 「バラチン」の戰爭とは

佛王「ルイ」和蘭戰爭以後益慾望を生じ、其將「ツールン」をして「バラチン」の地を襲はしめ、殘虐無道を極めたり、是に於て「オランジウ」侯「ウィルレム」此の時英國の王となりしが、歐洲諸國を聯合して其の暴

横を抑へんとせり、戰の始め「ルイ」の軍勝利を得しと雖、其の名將相尋きて死せしかば、佛軍遂に利を失ひ、一六九七年「リスウィック」の條約を結び、其侵略したる數多の土地を放棄して和議を結ぶに至れり。

### 三五 西班牙王位繼承戰爭とは

一七〇〇年西班牙王「カロロ」第二世子なくして卒し、遺言して「ルイ」王の孫「アンジッア」侯「フィリポ」に王位を譲れり、然るに「フィリポ」は尙幼なるが故に、此の遺言の實行せらるゝときは、西班牙の大權悉く「ルイ」王の手に落ち、歐洲諸國に恐るべき權力不平均となるべきが故に、日耳曼英國、和蘭、普魯士、相合して日耳曼帝の第二子「カロロ」を以て西班牙王位に登るべき權利ありとなし、一七〇〇年戰爭を開始し、毎戰連合軍の勝利に歸し、「ルイ」王今は如何ともする能はざるに至



りしが、偶然の事情によりて「ルイ」の目的を達するに至れり、偶然の事情とは何ぞや、其の一は日耳曼帝歿して「カロロ」が其の王位を繼ぎたることは是なり、故に同盟諸國も亦「カロロ」を助けて日耳曼、西班牙を合同せしむるを喜ばず、其の二は英國の内情一變したるが爲、英國は軍中にありて佛國と争ふ能はざることは是なり、是に於て「クトレヒト」(一七一三年)の條約に依りて和議を講ずるに至れり、此條約によりて「フィリポ」は西國王と見認められしかど、西佛の合併は許されず、英は佛領「ニューファウンドランド」「ノブアスコチア」「ハードソン」を得、西班牙より「ジブラルタル」「ミノルカ」を奪へり、更に「アツシント」條約(西英間)によりて、英は爾來、三十年間、毎年四千八百の黒奴を、亞非利加より米國、西班牙領に輸入するの權利を得たり、次に獨逸は「ネーデルラント」「サルゲニア」「ナポリ」「ミラノ」の一部を占領し、

「サアオア」侯國は「シ、リー」を得て一王國を立てたり。

三六 「ルイ」王功名心の爲に、屢、戦争を開きたるによりて佛國に及ぼしたる影響如何

佛國は爲に貧究に陥り、政府の歳入は大抵國債の抵當となり、工業商業等皆衰微の状を呈せり。

### 英國「スチユアード」王統

三七 「スチユアード」王統時代の特徵を問ふ

此の時代は政治上競争の時代にして、王は常に專制權を擴張せんと欲し、議院は常に人民の權利を伸張せんと欲し、兩者の間紛擾絶えたることなし、是れ即ち此の時代の特徵なりとす。

三八 「ゼームス」一世の人となり如何



「エリサベス」の逝くや(一六〇三年)蘇國の「セームス」一世位に即く「スチュアート」王統之より起る「セームス」一世は極めて頑迷驕傲、怯懦にして、人君たるの資格なきにも拘はらず、極めて尊大なる思想を有し、以爲らく國王には神聖犯すべからざるの權あり、臣民には百事唯た命之れ従ふ可きの義務ありとし、奢侈に耽りて人民の重歛に泣くを省みざりき。

### 三九 「セームス」一世と國會との關係如何

王は王權を擴張せんと欲し、國會は民權を伸張せんとせしより、兩者の爭常に絶えず、故に王は議院を忌むこと蛇蝎の如く、寧ろ之なきを欲すと雖も、如何せん金銀供給の不足を感ずるより、下議院に向つて之が要求の必要あるを、然れども下議院容易に其の請に應ぜずして曰く、金錢の供給を受けんと欲せば弊政を改めて議院の

權利を伸張すべしと、是に於て國會を解散せしこと幾回なるを知らずと雖、議院は益々固く執りて屈せず、次第に王の失政を矯め、有害なる王の專賣權を廢し、法廷の組織を改め、王の高官を去り、或は之を彈劾し、或は收税支配の權を固くし、加ふるに一國の安寧幸福に關する事件は悉く之を議定すべき權利を掌握するに至れり。

### 三〇 「チャールズ」一世の統治如何

「セームス」二世に嗣いて「チャールズ」一世即位す、王は不正の手段にて歳費を徴し、又國王神權説を唱へ議會と衝突するや、近衛兵を議場に亂入せしめ之を解散し、之より十一年の間絶えて國會を召集せず、「ストラッフナルド」侯及び大僧正「ロード」を以て顧問となし、高等法院に於ては異教者を糾弾し、星廳にては王政を誹るものを罰し、共に殘虐を極め、爲に罪戾に陥りたるもの其の數を知らず、「ピュ



「リタン」教徒の如きは、進退谷りて亞米利加に逃れたるもの甚だ多きに至れり。

三二 「チャーレス」が國會を召集せざるべからざるに至りし所以如何

英蘭は王の虐政に依りて紛々不穩の状をなせるに當り、「スコットランド」に於ては大僧正「ロード」が、無法の手段を用ゐて宗教の變化を行はんとせしより、人民大に怒り、終に干戈に訴へて英蘭に迫り又三十年戦争の爲に須要の問題發生せしかば、王又た議院を召集せざるべからざるに至れり。

三三 長期議會、其の處置、及び民望如何

長期議會とは一六四〇年に召集せられたる議會の名稱にて、十三年の長きに亘れるものにして王は爾來議會の意向を問はずして

解散すること無きを誓ひたり、議會既に開くるに及び、虐政を施したる「ストラップナルド」侯及「ロード」を斬り、高等法院及び星廳を廢せり、是に於て「チャーレス」は議院の王家に抗するに堪ふる能はず、軍隊を率ゐて、議院に至り、硬派の巨魁五人を捕へんとせしに、五人之を探知して市中に匿れ、七日を経て民兵に護送せられて議院に入り、此の時祝砲の響處々に起り、人民の歡聲は恰も雷鳴の如くなりしとぞ、民望の議院に歸せしを知るべし。

三三 爾後議院黨と「チャーレス」の葛藤及び王の末路如何

「チャーレス」王の國憲を蔑如する斯の如くなるに至るときは、如何んぞ内亂を生ぜざるを得ん、王は議院を覆さんと欲して兵を進め、貴族僧侶等之に與せり、「ピューリタン」教徒は「ロンドン」府民と合し、



議院を助けて互に戦争せり、議院軍初めは頻りに利を失ひしが、「オリバー・クロンエル」出づるに及びて、王軍大敗をなせり、時に一六四四年なり、翌年「ナスビー」の戦に於て、「クロンエル」王黨を鏖粉し、「チャールズ」は「スコットランド」に逃れしが、「スコットランド」人之を議院に送還するに及び、「クロンエル」は其の罪を數へて死刑に處せり、(一六四九年一月)是に於て王政亡びて共和政治起る。

三三四 「オリバー・クロンエル」の略歴を擧げよ

「クロンエル」は「ピューリタン」教徒なり、「チャールズ」王、議院と葛藤を生ずるに及び、精兵を率ゐて議院軍を助け、遂に王政を顛覆せり、此の時に當りて、「ピューリタン」黨は二派に分れ、一を「プレスビテリアン」と云ひ、一を「インデペンデント」と云ふ、政治上に於て前者は王政を制限せんと欲し、後者は共和政治を立てんことを欲するものなり。

り、而して議院黨の骨髄は實に是等の「ピューリタン」黨に在り、後「チャールズ」王が「スコットランド」に逃れて再び議院に送還せらるゝに及び、數回評議の後、「チャールズ」と議院との間に和議の調はんとするの狀ありしかば、「クロンエル」大に驚き、軍卒を派して「プレスビテリアン」人等平和主義に傾くものを院外に放逐し、遂に院議を以て、「チャールズ」を死刑に處せり、是より英國は一變して共和政治の軌道をなし、實權「クロンエル」に歸するに至れり、然るに「アイルランド」及び「スコットランド」に於ては、「チャールズ」二世の皇子を戴きて王となし、しかば、「クロンエル」即ち兵を率ゐて之を蹂躪せり、此の時に當りて、「クロンエル」の功業は獨り内國のみに止まらずして、同時に海上に於て和蘭人の驕傲を制して、大に英國の水軍の威を輝かせり、之より議院の政治は大抵「クロンエル」の意に従へりと雖、後に



至り往々「クロンエル」の意に満たざるの處置に出でしかば、即ち兵を送りて議院を解散し、自ら好む所の人を擧げて一議院を組織せり。

是より「クロンエル」は全く武斷的專制君主の實權を有すと雖、敢て王名を取らず、政をなす極めて活潑に外交亦強硬政策を取り、法王に抗し、英國の名譽は一旦「スチュアルト」家の爲めに埋没せられたるも、再び赫々の光を放ち、或は西班牙と戦ひ「ヂャマイカ」を取り、或は歐洲大陸の新教徒を保護して、隱然英國をして新教同盟の盟主たらしめ、和蘭をして辭を卑くして和を英國に乞はしむるに至れり。「クロンエル」の功亦大なりと云ふべし、然るに後年に至り英人既に武人の政治を忌み、共和の政體を嫌ひ、王黨及び「プレスビテリヤン」黨は勿論、共和黨の如きも皆此の專制主を排せんと欲せしかば、

「クロンエル」は常に非常を戒め、甲衣を着し毎夜寢室を更へて暗殺の患を避けんとせり、其の苦心思ふべきなり、斯くて一六五八年九月三日六十歳の壽を保ちて衽席の上に終れり。

### 三五 「ベヤポーン」國會(小人國會)とは何ぞや

「クロンエル」の勢力益盛なるに従つて、國會は益彼れを忌むに至れり、彼れ之を見るや直に之れを解散し、新に英吉利、蘇格蘭、及び「アイerland」の三國より成れる國會を組織せり、これを「ベヤポーン」國會といふ、而して其の議員は多く彼れの部下なりしなり、かくて國會は彼れに共和政體保護者の稱號を贈り、統治の全權は茲に彼れが掌中に歸せり。

### 三六 「クロムエル」の死後の状態及び「チャールズ二世」の即位を問ふ



「リチャード、クロンエル」交に代りて共和監理となりしが、無能にして任に堪へず、五ヶ月にして其の職を辭し、國內紛亂の間に衆望「チャールズ」第二世に歸し、之を迎へて王位に登らしめたり、時に一六六〇年なり、人民は王政復古を喜ぶの餘り、王權を制限するの備をなさざりしかば、英國は又專制政治を見るに至れり。

### 三三七 「チャールズ」二世の治世如何

「チャールズ」二世は奢侈暴虐の君なり、其の王位に登るや從來の國教を回復して異教徒を虐待し、其の和蘭と戰をなすに當りては、議院が海軍に充てたる財用を浪費蕩盡し、蘭船の襲來に遇ふも充分の軍備をなす能はず、敵艦をして「テームス」河に溯らしむるに至り、人望頓に地に落ちたり、佛國の「ルイ」第十四世が「フランドル」の戰爭を起すに及び、英國、和蘭、瑞典の三國聯合して佛を迎へんとせしに、

「チャールズ」は民心に反して陰に意を「ルイ」に通じ、「ルイ」が和蘭戰爭を起すに及び、英國議院は和蘭の「オランジェ」侯「ウイレルム」を助けんとせしに、「チャールズ」は佛を助けんとを誓ひ、正實愛國の名士を死刑に處し、暴威を振つて民黨を抑壓し、人心爲に洵々たり、國會は之を怒りて審査令（テスト、アクト）及び人身保護令を發せり。

### 三三八 名譽革命とは如何

「チャールズ」二世の弟「セームス」二世位に即ぐに及び、暴力に訴へて新教を回復せんとし、特に國王の特權を擴張して一世を驚せり、然るに其の女「メリー」は新教徒にして正に王の繼嗣なるを以て、人民望を「メリー」に屬し、苦痛を忍びしが、皇太子生るゝに及び此の希望全く絶えしかば、人民今は黙止すること能はず、英國の自由を保護せんがために「メリー」の夫なる「オランジェ」侯「ウイレルム」を迎へて國



王の位に即かしめたり、于時一六八八年「セームス」佛國に走りて「ルイ十四世」に寄す。

三九 「ウイリアム三世」(即ち「ウイレルム」)が裁可したる權利條例の主なる條目を擧げよ

(一)王は法律を發し又は法律の施行を止むること能はず、(二)王は國會の同意を待たずして租税を課すること能はず、(三)都て臣民は國王に向つて請願の權利を有す、(四)國會の協賛を経ずして平時に在りて軍隊を設くるを得ず、(五)議員の選舉及び議場の言論は須らく自由にして干涉制限を被らざるべし、(六)宗教裁判所を置くべからず、(七)國會の會合は須らく頻々なるべし等は、權利狀の要目なり。

三〇 「ウイリアム三世」の世議院の勢力を増加する原因となりしは何か

「ウイリアム三世」の意は「ルイ」第十四世の權威を滅殺するを以て主となし、英王の位を以て其の手段となし、に過ぎざれば、一國の政柄は大抵之を議院に附與し、只戦争の費用を議院より受けて自ら足れりとせり、是蓋し議院の勢力を増加する原因となりしものなり。

### 三一 王位繼承令とは如何

「ウイレルム三世」の代、曩に佛國に逃れたる「セームス」は密に愛蘭に上陸し、其の北部を占領し恢復を圖れり、其の徒を「ジャコピン」黨といふ、されど幾許もなくして「ウイリアム」王の爲に破られたり、かくて英國々會は一七〇一年を以て、今後の英國々王たるものは必ず新教徒たるべく、又當王に次ぐものは其の妹「アン」たるべく、其の後は「ハノーベル」家たるべしと議決せり。



### 三三 大不列顛の成立如何

「アン」女王位に即きて後英吉利、蘇格蘭は合併せり(一七〇七年)此より大不列顛國と稱し、一個の國會組織とせり。

### 三三三 「ハノーベル」王家の始を問ふ

「アン」女王嗣なくして死し(一七一四年)獨逸の選舉侯「ハノーベル」ハ  
ンノフェルの「ジョージ」は迎へられて國王となれり「ジョージ」一世  
之なり、連綿現代に至れる「ハノーベル」王系の祖なり、時の宰相「ワ  
ポール」ジョージ三世の妃「カロリン」等世々の王を輔け「ジョージ」三  
世の代には老「ピット」出て國勢益昂れり。

## 第十七世紀の文化

### 三四 第十七世紀の有名なる哲學者及び其の主張したる

#### 事柄如何

此の時に當りて英國には「ベーコン」尙書へて歸納論理の方法を教  
へ、佛國にては「デカルト」起りて萬疑の内より眞理を求索せんと欲  
し、和蘭には「スピノザ」出て、古代萬有神教の如き説を唱へ、日耳曼  
にては「ライブニッツ」出て、宇宙愛人の説を主張せり。

### 三五 第十七世紀中有名の理學者及び其の發見の事項を 舉げよ

(一)「ガリレオ」は望遠鏡を發明して始めて木星の月を見出し、(二)「ニウ  
ートン」は引力の道理を發見し、光線物色の理を説明し、(三)「トリセリ」  
は風雨針を作り、(四)「グリッケ」は排氣鐘を作り、「ハルベー」は血液循環の  
理を知り、(五)「ナプー」は對數比例式を考出し、(六)「パスカル」は空氣に  
重量あるを悟り、(七)「ケプレル」は遊星運行の三法則を世に出し、(八)「ル



「マー」は光線の速力を算定し、(九)「ホロックス」は金星經過を觀察し、(十)「スアレー」は彗星回期を預言したり。

三六 第十七世紀中文學の盛なりしは何國なるか、且つ其の著名なる學者を擧げて其の文學の種類を附記すべし

第十七世紀中文學の最も盛なるは佛國なり、悲體詩には「ラシン」あり、喜體詩には「モリエール」あり、戯曲には「ラフナルテイン」あり、美辭學には「ボツシユア」あり、是れ皆當世紀の大文學者なり。

三七 第十七世紀中畫術の最も盛なりしは何國ぞ、且其の名家を擧げよ

第十七世紀の畫術は「ネーデルランド」を以て魁となす、大名を世界に轟かしたるもの「ルーベンス」「バンチツク」「レンブラト」の三人あり。

### 露國の勃興附瑞典國王「カロロ」第十二世

三八 「ペテロ」帝以前の露國の國勢を略叙せよ

露西亞の建國は第九世紀「ノルマン」人「ルーリック」に生まれり、此の國屢蒙古種族の侵略を被むりしかば、「ルーリック」家より蒙古の首長に貢賦を獻じて臣禮を盡すこと二百年に及び、然るに一五三三年「イヴァン」四世大王立つに及び、蒙古の羈絆を脱し、「ノボゴロト」を從へ、嗣王に至りて「ケーザン」「アストラカン」「シベリア」を領地となして大に國土を擴め、「ツァール」(皇帝の義)と稱す、一五九八年其の系統絶え、内亂起り、一六一三年「ミカイル、ロマノツフ」帝冠を取るに至り、益強國となりしと雖、文化尙ほ開けず、艦隊を有せず、製造の業起らず、海港と稱すべきものは尙一の「アーカセル」あるのみ、瑞典人「バ



ルチック海に横行し、土耳其人黒海に跋扈し、露西亞は絶えて歐洲諸國と交際の機會を有せざりしが、一六四五年其の子「アレキシム」立ち大に國威を揚げ次て「ペテロ」帝立つに及びて俄然として形勢を一變じ、偉觀を呈するに至れり。

三三九 「ペテロ」帝「アゾフ」の地を取りたる所以如何

「ペテロ」帝露國の大權を握るに及び、人民の風俗を改め智識を増し、陋習を脱して文明の澤に浴せしめんと欲し、先づ海邊に一根據を得て外國との交通を便ならしむるの必要を感じ、即ち士馬を訓練し、機會を見て舟楫を整頓して「ドン」河を下り、土耳其と戦ひ之を破り黒海の門戸とも云ふべき「アゾフ」海を取るに至りしなり。(一六九八年)

三四〇 「ペテロ」帝の海外に遊びたる所以及び其の結果如何

「ペテロ」帝既に「アゾフ」の地を取りて外國の交通路を開き、更に進みて歐洲文明の奧秘を研究せんと欲し、大權を一貴族に委任し、和蘭に至りて親しく造船術を學び、兼れて製造術、社會制度等を考察し、留ること二年、又去りて英國普魯西に遊び、處々の造船所を巡覽して歸國し、乃ち速に社會の大改革に着手し、門閥の弊を矯め宗教の自由を許し、學校を立て軍制を改むる等、改良の點一にして足らず、暫時にして歐洲文物の美術漸く魯西亞に行はるゝに至れり、此の漫遊中國内の守舊黨帝の姉「ソフィア」を立てたるも事顯れて反徒は誅せられ「ソフィア」は寺院に幽閉せられたり。

三四一 「ペテロ」帝が噠馬及び波蘭と合同して瑞典を撃ちし目的如何

「バルチック」海上に一港を占領せんが爲にして瑞典王の幼なるに乗



じ之を奪はんとせるなり。

### 三三 露帝と瑞典王「カロロ」十二世との衝突を略叙せよ

「カロロ」十二世年僅に十五而も豪邁の風あり、加ふるに部下の兵亦精練の聞あり、故に魯、噠、波、三國連合を以て毫も意に介せず、急に兵を率ゐて噠馬に入り、二週日にして之を蹂躪し、轉じて「ナルバ」を圍み、九千の兵を以て六萬の露軍を壘粉し、尋いて波蘭に入りて其の王を廢せり、時に一七〇四年なり、されば「カロロ」の威名遠近に振ひ、英佛も亦和親を乞ふに至れり、「カロロ」是に於て心全く成功に酔ひ、更に進んで露西亞を侵さんとす、「ペテロ」帝和を講せんとするも聽かず、曰く「モスクバ」城下に於て條約を結ばんと、即ち露國の内地に侵入せり、露兵敢て敵せず、路を塞ぎ野を荒らし以て之を妨ぐるのみ、「カロロ」以て意となさず、百難を堪へて進行せしが、一冬極寒に遇

ひ其の兵凍死するもの多く、又俄に「ペテロ」の進撃に遇ひ、大敗して土耳其に逃れ、三年にして瑞典に歸り、國力の疲弊、人民の菜色あるにも係ばらず、兵を率ゐて那威を襲ひ、攻城の際銃丸に當りて死し、北方の一星殞れたり。(一七一八年)

### 三四 「ニスタット」の條約如何

「カロロ」逝き其の王妹瑞典王となり、「ニスタット」の條約を結べり、露國は之に依りて「インゲルマンランド」「リウランド」及び「エストランド」の一部を得、茲に「バルチック」海に臨める土地を得、其の希望の一端を遂げ、丁抹は其の領土を恢復し、波蘭は巨額の償金を得たり。

### 三五 「ペテロ」帝の政策を問ふ

外國の長所は何事も之に倣はむとし、先づ元老院議員を増加して、樞密官及び高等裁判官をも兼ねしめ、全國を十二省四十三州に分



ち、各州に知事を置き、陸軍を増し、海軍には最も多くの擴張をなせり、又人頭税を徴收し、居留外人よりは其の財産の十分の一を納めしめて權利を與へ、婦人の覆面を禁じ、結婚制度を改め、實際的教育を奨勵し、嚴に外國語の研究を爲さしめたり、而して此れ等急激なる改革に對して、苟しくも異議を挿む者あれば、親疎を問はず、これを重刑に處したり、帝は一七二五年を以て崩じ、代々の王善く大帝の志を守り、「カタリナ」女帝の世に至つて、露國の勢力、愈々強大となれり。

### 普魯士國の勃興

三五 「オーストリア」の王位繼承戦争を記せ

「オーストリア」王「カロロ」六世男子なかりしかば、其の女「マリア、テレ

サ」をして王位を繼がしめんとし、女子相續の勅令を發して、歐洲各國に承諾せしめたり、然るに一七四〇年王死して、「マリア、テレサ」王位に即くや、之に故障を唱ふるもの續々出て、「バワリア」侯「カロロ」は正統なる相續者と稱して、「オーストリア」の王位に上り、兼て日耳曼帝たらんと欲し、「フランス」の同意を得たり、「サクソン」の「アウグスト」三世は日耳曼皇帝の稱號を得んとし、普魯西王「フレデリキ」大王は「シレシア」州を得んとして、一七四一年戦争起り、互に勝敗ありしが、一七四八年「アーヘン」に於て條約を結び、「シレシア」を「フレデリキ」に與へ女子相續の勅令を履行して、其の局を結べり。

三六 普魯士國名の史上に著はれたるは何時よりなるか

一七四〇年「フリードリヒ、ヴィルヘルム」が「ブランデンブルグ」侯となりたるときよりなり。



三〇七 フリードリヒ、ウイルヘルムが武事に力めしことを

叙せよ

「フリードリヒ、ウイルヘルム」は極めて武事に熱心にして、其の力を増さんが爲めには國用をも節減せり、故に身體長大にして膂力衆に超えたるものを見る毎に、金錢を吝まらずして之を軍隊に誘へり、是即ち其の子「フリードリヒ」三世の用ゐて以て普魯士を歐洲の最強國たらしめたる手段となりしものなり。

三〇八 七年戦争の起原如何

奥地利王「マリア、テレサ」の王位に上るや各國争ふて其の王位を得んとして王に迫れり、「フリードリヒ」大王も領土の擴張を計りつゝありたるを以て、理由なくして奥國の「シレシア」を占領せり、かくて「マリア」は一旦「シレシア」の地を普魯士に與へしと雖、心陰に必ず之

を回復せんことを期し、其の宰相「コーニツ」と議を合せ、奥國、佛國、露國、「サクソン」瑞典、波蘭諸國の大連合を作り、以て普魯士を攻撃するの準備をなせり、是より戦争七年に連りしかば、之を名けて七年戦争と云ふ。

三〇九 七年戦争の結局

普魯士の軍、初め三年の間は頻りに勝利を得、爾後三年の間は頻りに敗北せり、然るに第七年に至りて俄然形勢を一變せり、即ち露國に於ては「エリサベタ」女帝卒して、「パテル」三世位に就きしに、此の帝は「フリードリヒ」の親友なるが故に、普魯士攻撃軍の同盟を脱して普魯士を助け、瑞典も亦露國と和を講ずるに至りて、普魯士の軍大に勢を増し、奥地利の兵を破り、後佛國も戦争を厭ふに至りしかば、一七六三年「フーベルツブルク」の條約に依りて和議を整へ、普國



三五〇 七年戦争が普國に與へたる結果如何

は「シレシア」を領するものと確認せられ、七年戦争始めて局を結べり、普國は此の戦争によりて「シレシア」を有するの權利を鞏固にし、「フリードリヒ」王の英名世に轟き、普國をして一躍して歐洲五大強國の一たらしめ、壤地利と共に雌雄を日耳曼帝國內に争はしむるに至れり。

三五二 「フリードリヒ」の治國如何

「フリードリヒ」は積年戦争の損害を回復せんと欲し、用を節し民を愛し、或は貧民に食物を給し種子を與へ、或は戦死者の妻子を扶助し、或は田地を改良し或は道路溝渠を作り、或は博物館を築く等實業及文藝を奨励し、大に國內の幸福を助けたり、王は一七八六年に崩せり。

英國「ハノーバー」王統

三五三 「ハノーバー」王統の英國に君臨せし所以如何

第十八世紀の始め女王「アン」卒して嗣なし、議院乃ち日耳曼「ハノーバー」侯「ジョルジ」を迎へて王となす是れ「ハノーバー」家英國君臨のなり。

三五五 「ハノーバー」王統の間重大なる現象は何ぞや

下院の勢力漸く強大に赴きしこと、改進黨保守兩黨の争漸く盛なりしこと、及び亞米利加の獨立戦争等是なり。

三五六 「ジョルジ」第一世の人となりを問ふ

「ジョルジ」一世は元來一箇の日耳曼人にして、絶えて英語に通ぜず、其の風儀野卑なりければ英人之を尊むもの少く、王も亦英國を愛



するの心乏しく、常に故國「ハノーバー」に戀々たり、然れども平生節儉にして財用を徒費せず、勤勉にして機務に怠らず、其の言信ずべく其の行頼むべし、故に英國は一般に平和なりき。

### 三五 十七八世紀に於ける在米歐洲殖民地の變遷を問ふ

三十年戦争以來、英國殖民地は次第に其の勢力を張り、西班牙の殖民地は衰退したり、又葡萄牙は「アラエヤ」灣沿岸に大なる領土を有せしが、「チャールズ」二世の時、英は之を占領して、其の大都「ニューアムステルダム」を「ニューヨーク」と改名せり、其の他英は「カロリナ」、「ユージーランド」、「ペンシルヴァニア」等に殖民地を造り、佛は「ミスシッピ」沿岸に「ヌーヴェルオルレアン」市を開けり、然るに七年戦争の起るや、在米の殖民地亦互に干戈を交へたり、當時「フロリダ」は西領、加奈陀「レイシアナ」は佛領なりしが、英佛の殖民人戦つて、英人勝

利を占め、一七五九年に至りて、全加奈陀は、英領たると公認せられ、次て西班牙は「フロリダ」を英に譲り、「レイシアナ」は英西之を分割せり。

### 三六 米國獨立戦争の源因如何

英吉利本國は七年戦争以來、國庫缺乏を感ぜしかば、先づ印紙條例（一七六五年）を發して、殖民地の書類には必ず印紙を貼用すべしと命ぜり、殖民地大に反對せしかば、政府は此の令を撤回し、更に一七六七年を以て輸入品に關稅を課せり、是に於いてか殖民地人民大に怒り、「アイラデルフィア」に大陸會議を開きて、殖民地が自治權を得るまでは、本國と通商せざるべしと決したり、而して本國は、飽く迄も彼れ等を服従せしめむとて、兵を派遣せり、其の軍隊の「レキシントン」に於いて殖民地人と衝突し、遂に獨立戦争の端を開けり。一



七七五

### 三七七 宣言書の發表及び合衆國に應援せる名士如何

此に於て殖民地は檄を飛ばして二万の義勇兵を得、英傑「ワシントン」を起たしめて之を將とし、各州委員五十五名の調印ある獨立宣言書を發表せり(一七七六年七月四日)、次て同盟規約を造り、十三州之れに加はれり、合衆國の名之より起る、此に於て「ワシントン」は名士「フランクリン」を佛國に派し其の暗黙の扶を得たり、佛人「ラファエット」、「波人」「コシウーシユ」「普人」「ストイベン」等は個人として之を援けたり。

### 三七八 獨立戰爭の經過及び經濟如何

自由の爲に生命を抛たんとせる米人は「バンカー」の第一戰以來屢利あり、一七七七年十月英將「バルゴイン」を降し、佛四の援軍を得て

勢益震ひ、一七八一年又英將「コーンワリス」を降すに至り、歐洲各國其の獨立を認め、英國に於ては小「ピット」内閣に入り、「ジョージ」王を説き、遂に巴里及び「ベルセイユ」に於て和を結び、茲に米國は獨立自治の國となれり、(一七八三年)此間の「ワシントン」が經營は蓋し幾何なりしかを知らず。

### 三七九 合衆國の統治方法如何

一七八七年九月憲法を發布し、大統領と元老院及び代議院より成れる議會とを政府の中心とし、元老院議員は各州より二名を出し、代議院議員は各州の人戸に應じ選出す、任期は前者六ヶ月後者二ケ年、大統領は任期を四年とし復選に依り選出す。

### 三八〇 波蘭の分割を問ふ

此國は早くより文明の域に進みたる國なりしが、國內貴族平民の



争常に絶えず、又「アウカスト」三世死して王位空しかりしとき、國內益亂れしに乘じ、露の「カタリナ」女帝これを襲はしめ、國王を逐ひ之を併せんとせり、普國亦久しく此國に垂涎せしが、遂に煥帝「ヨセフ」二世は露帝と同盟して之を分割せり、之を第一回分割といふ（一七七二年）、一七九三年國の騷亂に乘じ、普露兩帝は再び之を分割せり、之を第二回分割とす、憂國の士「コシワーシュ」は米國獨立の戦争より歸り兵を擧げしが遂に勝たず、是に於て兩國は第三回の分割を行ひ（一七九五年）爲に波蘭は滅亡せり。

### 佛國大革命

#### 三、フランス革命の原因を問ふ

一、財政の紊亂、「ルイ」十五世の時、佛國の公債は最も巨額に達し、政

府の信用全く地に墜ちたり、此の時に當りて攝政「オルレアン」侯は「ジョン・ロー」なる企業家の計を用ひ、「ルイ」シアナの想像の金鑛を抵當として、大に紙幣を亂發せしに、幾くもなく其の紙幣全く信用を失なひ、政府の財政更に困難を増すに至れり、王年長じて政を親にするに及びて、大小の政務、皆内嬖の手に委れしかば、紀綱紊亂し、國事日々に益々非なり、加ふるに煥國繼嗣の亂及び七年戦争は數億圓の國債を増加し民心恟々たり。

二、土地分配の不公平、「フランス」國民は三階級に分れ、僧侶、貴族は全國の三分の二の土地を占有し、平民は其の餘を所有するに過ぎざるも國費の大部分を負担して、其の苛税に苦めり。

三、上流社會の腐敗、「ルイ」十四世驕奢を好みしより、僧侶、貴族等皆其の風に染み、奢侈逸樂度なく、實官の制行はれて冗官愈多く、從



て平民の負擔愈甚だしくなれり。

四、新思想の發達、「モンテスキュー」「ルソー」「ホルテール」等出て、民主的新思想を鼓吹したるのみならず、民主國の模範北米合衆國に興起したるにより大に佛國の民心を刺戟したり。

五、王權の薄弱、「ルイ」十五世の治世は表面太平の如きも、内實は大亂將に起らんとする前兆ありしが、若し「ルイ」十六世にして非常の英傑ならば、平和の治を見たらんも、王は決して此の如き人にあらずして、溫和の徳を具ふるも剛氣果斷に乏しかりしにより、千古の大亂を惹起するに至れり。

### 三六三 「ルイ」第十六世は如何なる君なりしか

王は性質善良にして又知識をも具へたりと雖、優柔不斷にして國歩の艱難に當るに足らざる人なり、故に國事益々非にして悲慘の大

革命を招くに至れり。

### 三六四 「ルイ」第十六世が國會を召集したる所以如何

當時無數の弊害國內に充滿し、課税重くして人民は貧困の極に陥れり、「チュルゴー」「ネッケル」「カロンヌ」「ブリーヌ」等相繼て政事に盡力せりと雖、之を如何ともする能はず、「ネッケル」再び擧げられて政務の衝に當るに及び、最後の手段として國會を召集し、全國民の意見を問へり、時に一七八九年にして、前國會の召集より方に百七十五年を経過せり。

### 三六五 國會の狀況及び結果如何

國會は三種族の人々より成りたるものなるが、貴族僧侶は平民と局を分たんと欲し、平民は局を同うせんと欲せしが、平民の勢力強大にして自ら其の會を稱して全國會となし、貴族僧侶を誘ひて同



局に會せしめんとせり「ルイ」王即ち國會を停止せしかば、平民議員即ち他所に轉じ、佛國の憲法を議定せずんば決して解散せざるを誓へり之を國民議會といふ「ルイ」其の抑壓し難きを察し、貴族僧侶に乞ふて平民と一局に會せしめ、淺慮にも之を威嚇せんがために三萬の兵を集めたり、是に於て巴利府民大に激昂し、戎器を携へて國事犯罪者を投ずる「パスチーユ」の牢獄を破り、次て其の風波全國に及び、到る處人民の一揆あらざるはなく、亂民「ベルザイエ」王宮に闖入し、王族を曳いて巴里に來れり、此の紛亂に乗じ議院は積年の弊政を正し、憲法を制定し、國王は公衆の目前に於て之を裁可し、以來之を守るべきを誓へり。

### 三五 「ルイ」第十六世王の末路如何

當時國內に立憲黨、共和黨及び過激黨の三政黨あり、過激黨の國王

を憎むこと蛇蝎の如く「ロベスピエール」「ダントン」「マラーテ」は過激黨の魁たり、是に於て墮地利及び普魯士の兩國は國の秩序を正し尙「ルイ」に自由を與ふべしと申込み兵を擧げて佛を侵し共和黨は「ルイ」に迫りて開戦を宣告し、戦ひたるも利なく「ルイ」の運命益々危急に陥り、遂に「ロベスピエール」等のために「テンブル」の獄裏に投ぜられたり、是より過激黨獨り勢力を奮ひ、之に抗するものは皆捉へて獄に下し、遂に君主政體を廢して共和政體を布告し「ルイ」を國會に引致して其の罪を審判し、一七九三年一月二十一日之を斬罪に處するに至れり、之を佛國の大革命と云ふ。

### 三六 恐怖時代とは如何

「ルイ」王既に死刑に處せられ、過激黨獨り其の威を振ひ、其の黨人を以て公安委員を組織し、暴戾殘忍を極め、王黨は勿論共和黨をも殺



戮し、其の他多少反對の嫌疑を受けたるものにして、公安委員のため殺戮せられたる者幾千百なるを知らず、人民皆戦々慄々として其の堵に安ぜざるもの一年有半に及べり、之を稱して恐怖時代と云ふ（一七九三年六月頃より）。

三六七 「マーラー」「ダントン」「ロベスピエール」の末路如何

過激黨の巨魁中「マーラー」は早く一小女の爲めに殺され、「ダントン」は心漸く過激を厭ひたるを以て黨人のために斬られ、「ロベスピエール」獨り議院の全權を恣にせしが、議院も此の暴戾に堪ふる能はず、之を排斥せんと欲し、激争の後「ロベスピエール」を捉へて死刑に處せり。

三六八 巴利府民上官政府の組織に不満を懷き、兵を擧げて之を妨げんとしたるとき、之を鎮定したるものは誰

なりしか

「ナポレオン、ボナパルト」なり。

三六九 「ナポレオン」の伊太利に侵入したる始末如何

此の時に當り佛に反抗したるもの、英二國なりき、政府は「ナポレオン」をして、境を攻めしめたり、「ナポレオン」先づ三萬八千の兵を率ゐて伊太利に侵入し、轉じて境都を畧せんとせしが、此の時境地利の兵六萬伊太利に屯して佛兵に抵抗せるを以て、先づ之を破り、連戦連勝、境地利軍を壘粉せしかば、「ナポレオン」の威名伊太利に振ひ、北部「ロンバルデア」の地方皆其の有に歸し、羅馬法王及び「ネーブルス」國王の如き、戦々として和親を乞へり、「ナポレオン」乃ち進みて「ベニス」を覆へし、更に境都「ヴィーン」を攻めんとせしに、會、日耳曼にある佛軍の敗北の報に接し、少しく躊躇せし際、境國より和議を乞ひ



しかば、即ち「カンボ」フナルミチ」の條約を結び、奧地利に「ベネチア」を興へ、佛蘭西は「ベルギー」及び「ロンバルデア」の地方を取れり。

三七〇 「ナポレヲンの埃及遠征を問ふ

此の時、佛國に反抗せるは英國のみ「ナポレヲン」は、英の勢力を殺がんと欲し、先づ土領なる埃及を略しぬ、而して尙進んで英領印度を衝かんとせしに、英の海將「ネルソン」は、地中海にて佛の艦隊を破壊せしかば、「ナポレヲン」は「シリア」に向ひ、「アークル」を圍みたれど、英軍のために妨害せられ、志を得ずして引き返せり。(一七九八年)

三七二 「ナポレヲンは埃及より歸りて如何にせしか

是より先き佛國の執政官は漸く人望を失ひ、同時に英、魯、奧の三國合従して佛國に抗し、「ナポレヲン」の力に依りて占得したる伊太利の地も全く奧國に奪はれ、内外多事、必死の困難に迫れり、故に「ナポ

レヲン」の歸國に當りては、執政官は孤立援なく、些少の勢力をも有せず、「ナポレヲン」終に地中海を渡り佛國に歸り一隊の兵を率ゐて、議院に入り之を解散し、新憲法を制定し、三執政を置き、自ら十年の期限を以て第一等の執政となり、全國の大權を掌握せり。(一七九九年)

佛國近時の變遷

三七三 「ナポレヲン」佛國の全權を握るに及び、英、奧兩國は如何にせしか

英、奧兩國は「ナポレヲン」を以て篡奪者となし、「ルイ」十八世を以て佛國正當の君となし、之を王位に就かしめんと計れり、「ナポレヲン」即ち急に「アルプ」山を踰えて伊太利を伐ち、次て奧軍を破り、直に「ウイ



「ナポレオン」の城門に迫りしかば、奧帝遂に和を乞ふに至れり、時に紀元一八〇一年二月なり、英國は尙佛と和せざりしが、「ピット」宰相の位を去るに及び、「アミアン」條約を結び佛と和を結ぶに至れり、時に一八〇二年三月なり。

三七三 「ナポレオン」の帝位に昇りし次第を問ふ

「ナポレオン」は一八〇二年八月を以て、終身の首領となり、踰えて一八〇四年を以て羅馬法王より帝冠を受け、伊太利王を兼ね、其の子に羅馬王の稱號を與へたり。

三七四 佛奥の衝突を記せ

「ナポレオン」の帝位に上るや、英、露、奥は之れを承認せずして、大同盟を結び之に反抗せしが、「アウステルリッツ」の戦（一八〇五年）に於いて露奥の軍破れて、奥は「プレスブルグ」の條約を結び、「ベネチア」は伊太

利の領地となり、其の翌年に至りて、獨逸諸侯は「ライン」聯邦を造りて、佛帝を保護者と仰ぎ、奥の「フランシス」三世は神聖羅馬皇帝の位を退きて、奧太利帝と稱するに至れり。

三七五 「ナポレオン」の普魯西を破れる始末如何

一八〇六年を以て佛と普は戦端を交へ、佛軍勝つて伯林に入り、掠奪を擅にせり、かくて普王は其翌年を以て、「チルシット」條約を結び、「ライン、エルベ」兩河間の地を譲り、且佛の命によりて、常備軍を四萬二千人に限られ、償金一億四千フランを拂へり。

三七六 「ナポレオン」の政治如何

「ナポレオン」心を政治の改良に用ひ、鋭意佛國の利益を計り、其の編纂にかゝる「ナポレオン」法の如きは後代の模範となれり、實業教育、殖産興業を奨勵し又博覽會を起せり、然れども之と同時に人民の



自由を束縛し、言論集會の自由を制限し、専ら其の權力を鞏固にせんとせり、然れども「ナポレオン」能く國人の氣風を察し、舞踏唱歌の宴を張り、壯麗なる遊戯を施して民心を迎へ、且つ百般の施政其宜きを得たるを以て、人民は其の籠絡する所となれるが如し。

### 三七 「トラファルガル」の海戦を記せ

「ナポレオン」歐洲大陸の諸國と戦つて全勝を收め、歐洲全土皆其の命を奉ぜざるものなし、然るに英國は海軍を以て其の國を守り、敢て下らざるを以て、之を伐たんと欲し、海軍を組織したり、然るに英の「ネルソン」之を知り、一八〇五年十月「トラファルガル」に於て大に佛艦を破れり、此に於て佛國は輕しく英と雌雄を決せんとの念を一時絶ちたり。

### 三六 大陸條例とは如何

「ナポレオン」は歐洲諸國の英國と貿易するを禁じたり、之れ英國をして自ら疲弊せしめんと企てたるものにして、之を大陸條例といふ。

### 三七 「ナポレオン」の露國征討の次第如何

「ナポレオン」大陸條例を發したる後、露國は陰に英國と貿易せしむるを以て大に之を怒り、一八一二年大軍を率ゐて露國に侵入し、五月「モスコ」府に侵入せしに露軍市を焼き退き、佛兵爲に居るに家なく食ふに穀肉なく、露帝は之と和するを肯んぜず、已むを得ず退軍せんとするや、會雪大に降り、佛兵飢餓凍餒に苦むの際、露軍の追撃に遇ひ、全軍殆んど死し、「ナポレオン」僅に身を以て免れたり、(十月)是より「ナポレオン」俄然衰運に向へり。

### 三八 露國に敗れたる後「ナポレオン」は如何にせしか



「ナポレオン」露國に敗るゝに及び、露普墺の各國同盟して佛國に向ひしかば、再び兵を發して敵軍に當りしに、「ライプチヒ」の戦に大敗せり、此の時に當り英將「ウエリントン」又葡萄牙より上陸し佛國に亂入し、「バリ」城は遂に同盟軍の陥る所となりしかば、「ナポレオン」は帝位を剥がれ地中海の「エルバ」島に流されたり。

### 三二 佛國の王政復古を記せ

「ナポレオン」の破るゝや元老院は「ナポレオン」を廢し之を流謫したり、同盟軍は一七九二年の佛國の境界に復し、「ルイ」十八世を位に即かしめたるも、庸劣にして人望之に歸せざりき、かくて世人は復「ナポレオン」を想ふに當り、「ナポレオン」は陰に「エルバ」島を脱して佛國に入り（一八一五年三月）「ルイ」王を追ふて帝位を回復し、更に列國の兵を破らんと欲して、「アルテルロー」に戦ひ英將「ウエリントン」の破

### 三三 再度の王政復古後の佛國國狀如何

る所となり、米國に遁れんとして途に捕へられ尋て「アフリカ」沿海の一孤島「セントヘレナ」島に流され、「ルイ」十八世其の位に復せり。  
「ルイ」卒するに及びて其の弟「カロロ」第十世立ち、虐政を施したるを以て革命を招き、狼狽して國外に逃れ、「ルイ、フィリポ」位に即く、是れ第三變化なり、「ルイ、フィリポ」は政をなす常に寛大なりしと雖、當時國歩艱難にして、數多の政黨各所に樹立し、抗論争鬭絶ゆることなく、王の人望次第に衰へ、遂に逃れて英國に赴き、佛國は一の共和國となれり、「ルイ、ナポレオン」選ばれて大統領となり、遂に皇帝の位に昇り、佛國再び帝政を見るに至る、「ルイ、ナポレオン」普魯士と戦つて「セダン」に大敗し、遂に降を納るゝに及び、佛國再び共和政治を見るに至れり。



### 三三 維也納會議の結果を問ふ

一八一五年、奧、露、佛、英、普の維也納に會議せる結果左の如し。

(一) 奧國は「ミラン」及び「ベネチア」を恢復し。

(二) 普國は「ライン」州「ヴルシア」の一部「サクセン」大部等を得。

(三) 獨逸は三十九國及び四自由市を以て聯邦を造り。

(四) 露國は「ヴルシヤ」を得。

(五) 和蘭及び白耳義は合して「ネーデルラント」王國となれり。

(六) 英吉利は「マルタ」へ「サゴランド」及び喜望峰を得、且「アイオニア」

諸島共和國の保護者となりぬ。

(七) 諾威は瑞典に合併せらる。

(八) 丁抹は「ラヴェンブルグ」を得。

(九) 伊太利の「サルヂニア」土は「ゼノア」を合せり。

(十) 「ナポレオン」の廢せる西班牙、「タスカニー」、「モデナ」法王領、「ナル」  
「サルヂニア」等の王位は再興せられたり。

### 三四 神聖同盟を記せ

一八一五年「ウィーン」會議の際「アレキサンドル」帝の主唱により「ロシア」  
「プロシヤ」  
「オーストリア」の三國發起者となりて、神聖同盟を組織し、漸々諸國を勧誘して、之に加盟せしめたり、其の目的は基督教主義の博愛を以て政を施し、秩序を維持し、國際を圓滿にし、以て革命主義を消滅するにあり。

### 三五 英國の神聖同盟に對する態度を記せ

英王「ジョージ」四世は、神聖同盟の主旨には賛成せしも、同盟には加入せざりき。

### 三六 「メッテルニヒ」の事蹟を問ふ



「メッテルニヒ」は第十九世紀の初「オーストリア」の宰相なりしが、「ナポレオン」失敗の時、自ら中心となりて神聖同盟を組織し、大に大陸諸國の事件に干渉して、自由、改革の思想を沮止し、遂に同盟の目的をして、壓制專斷の具たらしむるに至れり。

### 最近世史

#### 三六七 商業上日耳曼の結合とは如何

聯邦條例に據るときは各邦の君主は皆憲法を設け人民の自由を保護せざるべからざる筈なり、然るに各邦の君主は皆之を忘却し、絶えて之を履行せざりしかば、自由に汲々たる人民は之を見て大に失望し、日耳曼聯邦の結合一致を希ふの念益々盛なり、各邦君主力を極めて之を妨げしにも拘はらず、全國一致の端緒は商業上に顯

はれたり、是れ即ち關稅連合として、連合内の國々は貨物を運送するに關稅の必要なく、連合諸國の物價を平均し、大に貿易の道を進むの功ありたるものなり、此の法は一八二八年に發し、普魯士之が中心たり、後此の連合に加はるもの次第に増加せり。

#### 三六八 日、奥の衝突を記せ

普國の日耳曼合一政略は常に奥國の妨ぐる所となりて、其の志を達するを得ざりしが、一時聯合して啞馬を征して其の三州を取り、普國は之を領せんと欲し、奥國は之を拒みたるより、戰端を開き、奥軍大敗して日耳曼外の國となり、巨額の償金を出せり。

#### 三六九 日耳曼聯邦制度の大略を説け

聯合諸邦皆政廳議院あり、王公之に君臨し、邦内の事項は自ら之處し、日耳曼全國に關することは大政府の命を仰がざるを得ず、大



政府にては國會立法を司り、皇帝行政を司り、宣戰媾和及び外國交際の權は皇帝の掌中にある、是れ其の制度の大略なり。

### 三九〇 伊太利の政況如何

伊太利諸州は列國會議の決議により、再び奥太利の治下に屬し、大小の侯伯、地利の權を恃みて下民を抑へたること尠からず、人民の自由は全く杜絶せられたり、是に於てか自由を希ふもの、往々不平を抱き、黨を結び伊太利の自由と合一とを主張し、國內常に不穩の狀を呈せり。

### 三九一 此の時に當り「サルヂニア」國は如何にせしか

「サルヂニア」は他の諸州と異なりて立憲政を行ひ、印刷と宗教との自由を許したれば、他邦の志士皆「サルヂニア」王「ビクトル、エマヌエル」に望を屬したり。

### 三九二 「カプーール」の事蹟を記せ

「カプーール」は「サルヂニア」王「エマヌエル」の宰相となるや、伊太利全土を統一するを以て其の志となし、「クリム」戦争の開くるや、英佛二國に加租して兵を出し、翌年の「パリ」媾和會議には自ら列席して、伊太利の慘狀を陳述して、諸國の同情を得、且「ナポレオン」三世と同盟し、遂に伊太利統一の目的を達したり。

### 三九三 「サルヂニア」王の伊太利統一を略叙せよ

「サルヂニア」王は「クリミヤ」戦争に關係して英佛の好意を領得し、佛國の援を藉りて奥地利と戦端を開き、「ロンバルヂア」の地を得たりしが、其の後「タスカニー」「モデナ」「パルマ」等、陸續として「サルヂニア」王の管下に歸せり、此の時「サヨセフ、ガリバルヂー」と云ふもの、自ら「サルヂニア」王の大將なりと稱して、「シ、リア」を征し、「ナポリ」を従へ、



「サルヂニア」王をして兩國を支配せしめたり、是に於て伊太利全國大抵「サルヂニア」の領地に歸し、一八六一年伊太利國會は「サルヂニア」王を推して伊太利國王となす、之を久うして「ベネチア」「ローマ」等皆王の治下に屬し、伊太利統一始めて大成せり。

### 三九四 希臘の再興を略叙せよ

希臘は土耳其の羈絆を蒙ること凡そ四百年、一八二一年遂に兵を擧げて反し、死力を盡して獨立を得んとせり、英人の如きも多く之を助けたれども、土耳其人慥悍にして之に克つ能はず、加ふるに埃及人亦土耳其を援けしかば、希臘人の困難實に想像するに堪へたり、幸にして英、佛、魯の三國同盟して希臘人を助け、一八三七年三國の艦隊相合して「ナポリ」灣に於て大に土耳其の海軍を破り、尋て佛兵「ペロポネッス」より埃及兵を逐ひしかば、希臘の獨立始めて大成せり。

### 三九五 白耳義の獨立を問ふ

成せり。

「ウィーン」の列國會議に於て「ネーザララント」は南北兩部相合して和蘭の一國をなし、が、南北常に相競ひて輿情常に協はず、終に一八三〇年佛國革命の際、南部兵を擧げて和蘭に抵抗し、終に獨立して日耳曼の貴族「レオポルド」其の王位に上り、英佛等之を承認したり。

### 三九六 東方に於ける英國の勢力を問ふ

是より先き英は十七世紀の頃印度を領するに至りしが、英帝の印度帝となれるは一八七七年なり、近世に至り其の勢力は次第に印度全部に及び、一八二四年には新嘉坡を、一八三九年には「アデン」を取れり、又鴉片の輸入に關し、一八四〇年清國と戦争を起し、が、翌



翌年の南京條約にて、英は香港を取れり。

三九七 露國の東方經營を問ふ

十七八世紀の頃より東方に眼を注ぎ先づ「カムサツカ」「アラスカ」「シベリア」を領し、「サガレン」島に上陸して我が邦に通商を求むるに至れり。(一八〇四年)

三九八 中央亞細亞に於ける英露の衝突を問ふ

露は益東方峻地に垂涎し、裏海沿岸の地を開き、印度に通路を開かむと欲して波斯を侵し、(一八二七年)波斯は露に通じて、阿富汗に侵入せり、是に於て英軍は直に阿富汗の首府「カブール」を圍みて(一八三九年)之を陥ぬれ、以て露の南下を防ぎ、今尙現狀を維持せり。

三九九 「ナポレオン」三世の即位の仕末を問ふ

佛王は「ナポレオン」黨及び共和黨を敵とし之が壓抑に力め、言論の

自由を禁し、又内治外交共に失敗を續けしかば國民の望を失ひたり、此の時に於て共和黨の勢力大に進み、選舉法改正會を開き、政府に反抗すべきを宣告せしかば、王は遂に英に逃れ、當時英に隠れたる「ルイ」「ナポレオン」歸國して人心を收攬し、一八四八年大統領となり、次て議會を解散し、十年の大統領となり(一八五一年)翌年一月國民多數の投票に依りて佛蘭皇帝の位に即じり、之を「ナポレオン」三世とす。

四〇〇 「クリム」戰爭を略述せよ

露帝「ニコラス」二世は土耳其古を分割せんと欲し英に向つて同盟を求めたるも、英の之に應せざりしを以て、單獨にて事を謀り、先づ土領内の基督教徒の保護者たるべしと要求し、強ひて「モルデヴァ」及「メラキア」を占領せり、此に於て英佛は兵を「クリム」に送り、土軍を



援け、露軍を破り、遂に其根據地たる「セバストポール」を陥れたり（一八五五年）此の年露帝崩し「アレキサンドル」立ち、翌年巴里に條約を結び和を成せり、其の結果黒海は公開せられ土領内の基督教は權利を擴張され、露の侵せる「モルデヴァイア」「アラキア」の二州は獨立し「ルーマニア」公國となり、後王國となれり。

#### 四〇一 英佛聯合軍の清國攻撃及び佛の東方經營を問ふ

一八五六年「アルロー」號事件起るや、英佛聯合して清國と戦ひ、一たび天津條約にて和議を結びたるが、次で一八六〇年再び開戦し、基督教徒の宣教を許さしめて和を成せり、更に佛は一八五九年安南と戦ひ、一八六二年柴棍を取り、一八六七年交趾支那全部を占領せり。

#### 四〇二 普佛戦争の原因を問ふ

「ナポレオン」三世は久しく「ライン」左岸の地を得んとを欲したり、會丁抹征討の結果に付て、普墺兩國間に葛藤を生じ、結局普は勝利者となり、日耳曼聯邦の強者となるに至れり、「ナポレオン」帝は局外中立を守りたる口實に依り、普國が此の時に於て得たる「シユレスワレヒ」「ホルスタイン」等を得んとせるも、普國は之に應せざりき、次て西班牙「イサベラ」女王が人望を失ひ位を去るや、其の繼承者は普王の一族たるを以て之を非認せんとして成らず、此に於て佛帝怒つて普に對して開戦を布告せり。

#### 四〇三 「ナポレオン」三世の末路如何

時の普相は「ビスマルク」にして「ワイルヘルム」二世を弼け、將軍「モルトゲ」善く兵を用ゐ、佛軍毎戦利あらず、遂に帝は「マクマホン」と共に僅に「セダン」の一城を守りしも、久しからずして力盡きて降服せり、



(一八七〇年)此くして帝は英國に放たれて其土に死せり。

#### 四〇四 「フランクフルト」條約を問ふ

「ナポレオン」の敗報巴里に至るや、巴里府民は假政府を設け、普に和を請ひしが、土地割讓の條件なかりしたため議成らず、普軍直に巴里を圍み、之を陥れたり、翌一八七一年一月、ヴェルサイユに假條約を結び、次で「フランクフルト」に本條約を結べり、是に由りて普は三年間に五十億「フラン」の償金と、「アルサス」「ローレン」三州の一部とを得たり、爾來佛國は共和政體を組織せり。

#### 四〇五 獨逸帝國の建立を問ふ

一八六九年南北獨逸諸邦は、獨逸一統の必要を認め、普魯西王を世襲の獨逸皇帝となすを決定せしかば、「ウィルヘルム」二世は、翌年一月「ヴェルサイユ」にて、獨逸皇帝の位に上れり、かくて全年三月帝國議會

を開設して、新憲法を制定せり。

#### 四〇六 北米合衆國の膨脹を問ふ

西班牙より「フロリダ」を買ひ、「テキサス」を合せ、「メキシコ」と戦ひて、「ユーマキシコ」及び「カリフォルニア」を取り、次で「オレゴン」をとり、「カドスデン」を合併せり。

#### 四〇七 南北戦争を略述せよ

北米合衆國に於て一八二一年保護税法發布せられ、其の翌年奴隸廢止會起り共和黨は之を贊助し民政黨は之を非認せり、一八六〇年共和黨の「リンコルン」大統領となるや、南部六州は之を喜ばず、假政府を立て附近の五州を加はせしめ勢盛なりし、「グラント」將軍北軍を率ひ南軍の根據地「リチモンド」を陥れ(一八六五年)「ジョンソン」大統領となるや、奴隸を開放し一八六七年分離せる諸州亦統一せ



らるゝに至れり。

四〇八 露土戦争を畧記せよ

野心に満ちたる露軍は一八七八年土領に侵入し「オスマン」「パシア」將軍の守れる「ブレブナ」城を陥る、英國は之を見て調停を提出せり、露は之を斥けんと欲せしが、英國の怒つて開戦を迫らむことを恐れ、急に「サンステファアノ」條約を結び土耳其と締結せり。

四〇九 伯林會議を問ふ

英國は「サンステファアノ」條約に就て異議を申込み、列國會議の開設を請求せり、是に於いてか、奧露英は伯林會議を開けり（一八七八年六月）其の結果左の如し。

「モンテネグロ」「ルーマニア」「セルヴィア」の三國は獨立す。

「アルガリア」の一部は土領となり、他の一部は東「ルーマニア」と稱

して、土領内の自治州となり、基督教の太守之を治む。

「ボスニア」「ヘルツェゴヴィナ」は奧太利施政の下に立つ。

「エハイラス」「テッサリー」は希臘の領となる。

露は「ベッサラ」「カルス」「アルダソン」等を得。

英は土耳其領亞細亞を保護すとの名義の下に「キプロス」島を得。土耳其は兩教徒に同等の權利を與ふべしと約せり。



西洋歴史問答終

附録第一

歴史年表

西曆紀元前

- 前二七〇〇頃 「メニヰズ」埃及の「メンフネス」府を創建して埃及史創まる
- 前二七〇〇—二六〇〇 埃及舊帝國
- 前二三〇〇頃 「ニムロッド」巴比倫帝國を立つ
- 前二〇〇〇—一五五〇 埃及中帝國
- 前二〇〇〇頃 「アブラハム」迦南に漂ふ
- 前一九〇〇—一五五〇 「ヒクソス」人種埃及を支配す
- 前一五五〇頃 「フェニキア」國「シドン」府創建
- 前一五五〇—一五三七 埃及新帝國



- 前二九一 猶太人、埃及を逐はる
- 前二三〇頃 猶太人、居所を迦南に定む
- 前三五〇 「アツシリア」國起る
- 前三〇〇頃 婆羅門教經典「ビダス」成る
- 前二〇〇頃 「ドリリア」人の轉遷
- 前一〇九五 猶太人「サミウエル」を立て、國王となす、猶太王國創まる
- 前一〇一五—九七五 猶太「ソロモン」王の治世
- 前九七五 猶太國分裂
- 前八〇〇頃 亞弗利加の「カルタゴ」創立
- 前八五〇 「アツシリア」人「フェニキア」を征服す
- 前八世紀頃 馬太人、波斯人「ザグロス」山の東方に居住す
- 前七七六 希臘第一回「オリンピック」祭典舉行

- 前七五 羅馬の創立
- 前七三—七四 第一回「メシナア」戦争
- 前六五—六六 第二回「メシナア」戦争
- 前六〇 日本神武天皇即位
- 前五五 「アツシリア」國の「ニ、ベ」城陥落
- 前六四頃 希臘の「ドレコロ」法典を撰す
- 前五三 波斯王「ダライヤス」、希臘を侵し水陸共に大敗す
- 前五八 「ネアカドネザル」猶太の「エルサレム」を陥る
- 前五六 波斯王「サイラス」、馬太國を併吞す
- 前五七 「スパルタ」人「ペロポネサス」に主權を握る
- 前五八 波斯王「キロス」、新「バビロニア」國を亡して波斯の一部となす



前五七

波斯王「カンピセス」埃及を征服す

前五九

羅馬に於て共和政を創む

前四九〇

波斯王「ダライアス」希臘を侵して「マラトン」に大敗す

前四八〇

波斯王「クセルクス」希臘を侵して「テルモピレ」  
「サラミス」に大敗す

前四七九

「プラチア」「ミケル」の兩戦共に波斯の大敗に歸す

前四七九—四七九

希臘の「ペリクル」「アテネ」の政を執る

前四四九

希臘人「サラミス」に戦つて波斯人を破る

前四四四

羅馬「コンサル」政治を廢して民長官を置く

前四三二—四三二

「ペロポネソス」同盟「アテネ」同盟と戦ふ

前四二五—四二三

「アテネ」人「シラキウス」を征して利あらず

前四〇五

「スパルタ」の將「リサンデル」「エゴスポタマス」に戦つて「アテ

ネ」の水軍を破る

前四〇四—三九一

「スパルタ」主權を握る

前三九七

希臘の哲學者「ソクラテス」毒殺せらる

前三九〇

「ゴール」人、羅馬を取る

前三七一

「デーベ」の將「エバミノンダス」「リュウクトラ」に戦つて「スパ  
ルタ」の兵を破る

前三七一—三三三

「スパルタ」主權を握る

前三三三

「エバミノンダス」「マンチニヤ」に戦つて「スパルタ」人を破り  
戦死す

前三三二

希臘の「デモステニス」非立攻撃演説をなす

前三二八

希臘の哲學者「プラトン」死す

前三二六—三三三

「アレキサンデル」大王の御世



- 前二四〇 「アレキサンデル」天王、波斯を征す
- 前二三三 「アレキサンドリア」府を開く
- 前二三三 希臘哲學者「アリストテレス」死す
- 前三一 「アレキサンデル」天王、巴比倫を亡す
- 前三一 「アレキサンデル」天王、巴比倫に死す
- 前二六四—二四二 第一回「ピウニツク」戦争(羅馬「カルタゴ」の戦争)
- 前二五—三三 羅馬人「シサルピンゴール」を征服す
- 前三一 「ハンニバル」「カルタゴ」の大將となる
- 前二八 「ハンニバル」伊太利に出軍す
- 前二八一—二〇一 第二回「ピウニツク」戦争(羅馬「カルタゴ」の戦争)
- 前二六 「ハンニバル」「カンネー」の地に戦つて羅馬人を破る
- 前二五—二〇 第一回「マセドニア」戦争(羅馬「マセドンの」戦)

- 前二〇五 「シピナ」羅馬の執政となる
- 前二〇三 羅馬人「ザマ」に戦つて「ハンニバル」を破る
- 前二〇〇—一九七 第二回「マセドナ」戦争(羅馬「マセドナの」戦)
- 前一七一—一六六 第三回「マセドナ」戦争
- 前一九七—一八四 第三回「ピウニツク」戦争(羅馬「カルタゴ」の戦)
- 前一八四—一八四 第四回「マセドナ」戦争(羅馬「マセドナの」戦)
- 前一八四 「マセドナ」國亡びて羅馬の屬國となる
- 前一八四 羅馬人「カルタゴ」を滅す
- 前一〇三 羅馬の大將「マリウス」「チウトン」人を破る
- 前八—八二 羅馬の「スルラ」「マリウス」權を争ひて亂を作す
- 前六 羅馬の「ポンペイ」猶太の「イエルサレム」を取る
- 前六 羅馬の「シセロ」「カチリン」の攻撃演説をなす



前六〇

羅馬の第一回三頭政治「ケーザル」「ポンペイウス」「クラスス」

前五一

羅馬の「ケーザル」「ポール」を征す

前四七

羅馬の「ケーザル」「プリテン」を征す

前四六

「ポンペイウス」「ケーザル」と戦つて敗死す

前四一

「ケーザル」埃及を征す

前四〇

「ケーザル」羅馬の終身大總督となる

前三九

「ケーザル」暗殺せらる

前三八

羅馬第二回三頭政治「アントニー」「オクタピウス」「レピダス」

前三一紀元二四

羅馬帝「ケーザル」オクタピウスの御世

前四

耶蘇基督、猶太に生る

### 西暦紀元後

一四一七

羅馬帝「チベリウス」の御世

一四一

「ネロ」帝の世

一四〇

羅馬帝「ネロ」火を羅馬府に放ち其罪を耶蘇教徒に歸して之を處刑す

一三九

羅馬の「タイタス」「イエルサレム」を陥れ猶太人四散す

一三八

羅馬の將「アグリコラ」「プリテン」を征し蘇國に入る

一四一

「アルメニア」「メソポタミア」「アッシリア」の諸國羅馬に歸す

一三八

羅馬建國一千年祭を行ふ

一三六

羅馬帝「コンスタンチナ」大帝の御世

一三〇

羅馬の「コンスタンチナ」帝「コンスタンチノーブル」を首府



とす

三三七

羅馬帝國の政務三分す

三七五

「チウトン」種族轉徙を始む

三七六

四「ゴース」人「ドナウ」河を渡りて羅馬の國境を侵す

三九四—三九五

羅馬帝「テオドシウス」羅馬帝國の政務を一統す

三九五

羅馬帝國分れて東西二部となる

三九五—四四五

東羅馬帝國(「ビザンチウム」に都す)

三九五—四七六

西羅馬帝國(羅馬に都し後ち「ラベンフ」に移る)

四一〇

四「ゴース」の酋長「アラリツク」羅馬を陥る

四四九

「サクソン」人「アングロ」人「ブリテン」の地を略す

四四三

匈奴王「アツチラ」伊太利を侵す

四七六

日耳曼の酋長「オドーサー」西羅馬帝國を亡し上古史終を

告ぐ

四八六

北「ゴール」の「フランク」王國創建

四九三—五二六

東「ゴート」の王「セオドリツク」「オドーサー」を破りて伊太利

を領す

四九六

「フランク」王「クロビス」「アラマン」人を破り耶蘇教に歸す

五五五

伊太利の東「ゴート」王國亡ぶ

五六八—七七四

伊太利の「ロンバルド」王國

五七〇

回教祖「マホメット」降誕

五九〇

「グレゴリ」二世羅馬法皇となる(法皇の始)

五九六

「セント、オウガスチン」「ブリテン」に布教す

六〇九

「マホメット」宣教の始

六三三

「マホメット」「メッカ」より「メヂナ」に逃る



- 六三三 「マホメツト」死す
- 六七三 「サラセン」人「コンスタンチノブル」を圍む
- 七二二 「サラセン」人、西班牙に入りて西「ゴート」王國を亡す
- 七三三 「フランク」王の宮内大臣「カロロマルテル」大に「サラセン」人を破る
- 七五二 「フランク」王の宮内大臣「ピピン」自立して「フランク」の王となる
- 七六八—八二四 「カロロ」大帝
- 八〇〇 「カロロ」西羅馬皇帝となる
- 八三三 「サラセン」人「クレート」島を征す
- 八三七—八七八 「サラセン」人「シ、リ」島を征す
- 八三七—八七五 英國「サクソンの王」エグバート」七小國を合して英國を統

一す

- 八七一—九〇〇 英國「アルフレット」大王
- 九三四 英王「エドワルド」全「ブリテン」に君臨す
- 九三六—九七三 日耳曼の「オト」一世大王
- 一〇一六—一〇四二 「デーン」人、英國の主權を握る
- 一〇六六 英王「ハロルド」ノルマン」侯「ウイレルム」と「ヘスチングス」に戦つて敗死す
- 一〇六六—一〇六六 英國「ノルマン」王朝
- 一〇七三—一〇八五 法皇「グレゴリ」七世、日耳曼王「ハインリヒ」四世と争ふ
- 一〇七六 土耳其人「イェルサレム」を取る
- 一〇七七 「ハインリヒ」四世、罪を「グレゴリ」七世に謝す
- 一〇九六—一〇九九 第一回十字軍



- 一〇九 十字軍「イェルサレム」を陥る
- 一四七—一四九 第二回十字軍
- 一七一 英王「ヘンリー」三世「アイルランド」を征服す
- 一八九 第三回十字軍
- 一九一 日本源頼朝、征夷大將軍となる
- 一〇三—一〇四 第四回十字軍
- 一三八—一三九 第五回十字軍
- 一三三 蒙古人、支那の金朝を亡す
- 一三七 西班牙の回教王國「アラナダ」に起る
- 一四四 回教人「イェルサレム」を取り永く之を領す
- 一四八—一四九 第六回十字軍
- 一五八 蒙古人「バクタット」を征して回教政府を亡す

一七〇

第七回十字軍

- 一八〇 蒙古の酋長奇渥溫忽必烈、支那を征服して帝となる
- 一八一 忽必烈、日本を侵して大敗す
- 一九五 英國最初の國會
- 一九八 英王「エドワード」一世、蘇國の反徒を征す
- 二一五 瑞西共和國の兵、奧地利公「レナポルド」を「モルガートン」に破る
- 二二二 日本後醍醐天皇王政を回復す
- 二三六—二三九 日本南北兩朝併立す
- 三三九—三四三 百年戦争(佛、英と戦ふ)
- 三四七 「リエンシ」羅馬の政体を更めて自ら民長官となる
- 三四八 英兵、佛軍を「オルレアン」城に圍む



- 一四三九 佛の少女「シヤンダルク」「オルレヤン」の圖を解く
- 一四四〇頃 日耳曼人「ジョンガーテンベルク」印刷術を始む
- 一四五三 土耳其人「コンスタンノブル」を陥れ東羅馬帝國亡ぶ
- 一四五五—一四八五 薔薇戦争(英の「ランカスター」「ヨーク」兩家王位を争ふ)
- 一四六一—一四八五 英國「ヨーク」家の朝
- 一四七一 「アラゴン」王「ヘルザナンド」「カスチル」女王「イサベラ」と婚し  
二王國合一す
- 一五〇〇 露帝「イバン」四世、蒙古人を征服して露國を一統し帝國の  
基礎を建つ
- 一四八五—一六〇三 英國「チュウドル」王朝
- 一四八六 葡萄牙人「バルトロミュー、ヂヤス」喜望峰に達す
- 一四九二 「グラナダ」亡ぶ

- 一四九二 「コロンバス」亞米利加を發見す
- 一四九八 西班牙人「バスコダガマ」東印度に至る航路を發見す
- 一五二五—一五四七 佛王「フランソアシス」二世  
「マルチンルーテル」宗教改革の意見を發表す
- 一五二七 葡萄牙の「マダラン」始めて地球を一週す
- 一五三二—一五三六 日耳曼王「カロロ」五世、佛王「フランソア」二世と戦ふ
- 一五三二 「マルチンルーテル」「ナルムス」の會議に出席す
- 一五三六—一六一 印度の「モウゴル」帝國
- 一五三九 土耳其の「ソリマン」二世、維納を圍む
- 一五三二 新教諸侯「シユマルカルド」に同盟を結ぶ
- 一五五八 英國、佛と戦ひて「カレイ」の地を失ふ
- 一五八—一六〇三 英國女王「エリサベス」



- 一五三—一五九 佛國「ユクノー」黨の亂
- 一五三 佛國人初めて北米「カロリナ」に殖民す
- 一五七 「ユクノー」黨を虚殺す
- 一五五 英人「チウタラレイ」北米「バルザニヤ」殖民の基を開く
- 一五七 蘇國女王「メリー」死刑に處せらる
- 一五九 佛國「ナント」の令を發し新舊兩教徒に同等の權利を與ふ
- 一六〇 日本徳川家康征夷大將軍となる
- 一六八—一六九 三十年戦争
- 一六四—一六五 佛國「リセリウ」の執政
- 一六五 「ワレンスタイン」日耳曼軍を統ぶ(三十年戦争)
- 一六三 「ライプチヒ」の戰(瑞典王「ガスタバス」大に日耳曼軍を破る)
- 一六四 日耳曼將「ワレンスタイン」刺殺せらる

- 一六〇 英人、印度の「マドラス」に殖民す
- 一六三—一六四 英國內亂
- 一六四 韃靼人、支那を征服して清朝を建つ
- 一六四 「オリバー、クロムエル」大に王軍を破る
- 一六四 英王「チャールズ」一世死刑に處せらる
- 一六五 「クロムエル」長期國會を解散して新國會を召集す
- 一六五 佛國「ナント」の布告を廢止す
- 一六八 「オレンジ」侯「ヴィルム」英國國民の招に應じて英國に入る
- 一六八 英王「ゼームス」二世、佛に走る
- 一六九—一七〇 英佛と戦ふ
- 一六九—一七〇 露帝「ピテル」一世
- 一七〇—一七一 瑞典王「カロ」十二世



- 一六九六 「ピテル」帝「アゾフ」海を取る
- 一七〇一—一七〇四 西班牙王位繼承争亂
- 一七〇三—一七〇四 英國女王「アン」
- 一七〇七 英國、蘇國と合して大「プリティーン」と稱す
- 一七〇八 東印度會社の起原
- 一七二五—一七二六 英國「チャコピン」黨の亂
- 一七三〇—一七三〇 「ザルガニヤ」王「ビクトル」アマゲユウス
- 一七四〇—一七四八 澳國王位繼承争亂
- 一七五五—一七六三 七年戦争(英、佛と戦ふ)
- 一七五六—一七六三 英人、佛人と印度に戦ふ
- 一七五五—一七八三 北亞米利加合衆國の獨立戦争
- 一七七五 「レキシントン」及び「コンコルド」の役(米國) (安永四年)

- 一七六六 米國獨立を宣言す
- 一七八九 「ワシントン」北米合衆國大統領となる (寛政元年)
- 一七九三—一八一五 佛國革命戦争
- 一七九三 佛國「ルイ」十六世を死刑に處す
- 一七九六 佛將「ナポレオン」伊太利に戦ふ
- 一七九七 「ナポレオン」「アルプ」山を越ゆ
- 一七九八 英將「ネルソン」「ナイル」河に戦つて佛軍を破る
- 一七九九 「ナポレオン」佛國の大總督となる
- 一八〇五 英將「ネルソン」「トラハルガル」に戦つて佛國及び西班牙の兵を破る
- 一八二二 「ナポレオン」露國に入りて「モスクー」に大敗す
- 一八二五 「ウチーターロー」の戦(ナポレオン)大敗す (文化十二年)



- 一八三二—一八三九 希臘獨立戦争
- 一八四〇—一八四三 阿片戦争(英國、支那と戦ふ)
- 一八四六 「ルイ、ナポレオン」佛國大統領となる
- 一八五三 「ルイ、ナポレオン」自ら帝位に即く
- 一八五四—一八五六 「クリミア」戦争(英佛普墺の諸國、露軍と戦ふ)(安政元年—三年)
- 一八五四—一八五五 「セバストポル」の攻圍
- 一八六一—一八六五 北米合衆國の南北戦争(文久元年)
- 一八六五 米國北軍の大將「グラント」南軍の將「リー」を降す
- 一八六六 墺普戦争
- 一八六七 日本皇帝、王政を回復す
- 一八六九 「スエズ」運河開通式を行ふ



一八七〇

普佛戦争(ナポレオン三世、普王に降る) (明治三年)

一八七六

伯林會議

一八八三—一八八四

清佛戦争

一八九四—一八九五

日本海陸の軍を發して支那を征す

一八九七

希土戦争

一八九八

米西戦争

一八九九

英杜戦争

一九〇〇

北清事變











佛 國

リ チ ヤ ル ド ソ ン	ポ ー ブ	ア チ ツ ン	ス ウ イ フ ト	ロ ッ ク	ベ ン ザ ム	ア ダ ム ス ミ ス	ラ ブ ラ ー ス	ラ ボ ア セ ル	ジ ヤ カ ル ド	モ ン テ ス キ ウ	ル ー ソ ウ	ホ ル テ ー ル
---------------------------------	-------------	------------------	-----------------------	-------------	------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	------------------	-----------------------

哲學家

理學家

發明家

哲學家











キチビエル	アラコ	ルプリエロ	ギゾ	ユゴ	ベルネ	ドレ	プレスコット	エマルソン	モル	エダソン	ドニゼチ	ベル	イタリ	瑞西
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
哲學家	理學家	理學家	文學家	文學家	技術學	技術學	文學家	文學家	發明家	發明家	技術家	技術家	理學家	理學家

附録 第三

官立諸學校入學試験問題 (明治卅六年度)

●女子高等師範學校

- (一) 戰國時代に於ける齊、秦の疆域は凡そ現今支那の何省の地に當るや
  - (二) 拔都の事蹟を問ふ
  - (三) 支那にて南北朝の世と稱するは如何なる時代なるや
  - (四) アッシリア滅亡後其屬領地内に興りたる國の名及び其位地を問ふ
  - (五) 西曆八百四十三年の「ヴェルダン」の和約を説明せよ
  - (六) 三十年戦争の原因及び此戦争に關係したる重なる人の名を問ふ
- 東京郵便電信學校
- (一) クリミア戦争の顛末如何



●東京外國語學校

- (一)ロオールドールの戦争
- (二)左記の内五名に付きて知れる所を記るせ
  - バスコダガマ Vasco da Gama.
  - マゼラン Magellan.
  - ヨハン、グーテンベルク Johann Gutenberg.
  - オリバ、クロンウエル Oliver Cromwell.
  - ミラボー Mirabeau.
  - マクマオン Mac Mahon.
  - エブラム、リンコルン Abraham Lincoln.
  - ジョーシ、ステブenson George Stephenson.

●高等學校

- (一)赤十字社の起源竝に我國加盟の年を問ふ
- (二)左の諸源につきて知る所を記せ
  - (イ)クカダチ(盟神探湯)
  - (ロ)モンロー主義(Monroe Doctrine)
  - (ハ)洪秀全
  - (ニ)朱之瑜
  - (ホ)レセツプス(Lesseps)

●東京高等師範學校豫科

- (一)北アメリカ獨立戦争の原因
- (二)左の人々の事蹟
  - (イ)ダリオス Darios.
  - (ロ)アグリッパ Agrippa.



(ハ)ヂアス Diaz.

(ニ)モリエール Moliere.

(三)左の地に關する事蹟

(イ)イプソス Iphigeneia.

(ロ)カーチー Canane.

(ハ)ウォルムス Worms.

(ニ)アウステルリッツ Austerlitz.

●専門學校入學志願者檢定

(一)露人のシベリア經畧

(二)獨乙勃興の原因

(三)次の各項につきて知る所を記せ

(一)バスコダガマ (二)西曆一八一五年

●東京高等商業學校豫科

(一)近世ニ於ける歐洲諸國東方經略の大要を述べよ

(二)左の人々の事蹟を述べよ

フレデリキ二世 王守仁

(三)左の事項を簡短に述べよ

ウエストリアア條約 足高 青苗法

●音樂學校甲種師範科

(一)佛國革命の大體

●士官候補生

(二)左の項を記述せよ

(イ)ライカールガスの憲法

(ロ)百年戦争



(八)モンロー主義

●海軍兵學校

- (一)シーザーの事業を記せ
- (二)十九世紀に於ける著名の事件を年代順に列擧せよ

●商船學校

- (一)左の人々の事蹟を略記すべし
  - アメリカ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci)
  - セキストクリス (Themistocles)
  - ジュヤステイニアン (Justinian)
  - ゴッドフリー (Godfrey)

附 録 終



明治三十七年六月二十日印刷

西洋歷史問答與付

明治三十七年六月廿三日發行

正價金拾五錢

著作權所有

發兌元

(明治廿九年六月設立)

發行者

東京市神田區裏神保町九番地

合資會社 富山房

代表者

合資會社 富山房社長

坂本嘉治馬

印刷者

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目三番地

森潤二

印刷所

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目三番地

株式會社 秀英舍第一工場

合資會社 富山房  
長距離(電話本局)電報(ヤマフ)略號(一〇三六)加入







明治三十七年六月二十日印刷

西洋歷史問答與付

明治三十七年六月廿三日發行

正價金拾五錢



發行者

東京市神田區裏神保町九番地  
合資會社 富山房

代表者

合資會社富山房社長  
坂本嘉治馬

印刷者

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目三番地  
森潤二

印刷所

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目三番地  
株式會社 秀英舎 第一工場

發兌元

(明治廿九年六月設立)

合資會社 富山房  
長距離(電話本局)電報(ヤマフ)略號(ヤマフ)加入



諸大執家筆富山房編輯部

# 最新問答全書

學生の寶鑑

- 第一編 日本地理問答 (地圖入)
- 第二編 世界地理問答 (地圖入)
- 第三編 日本歷史問答 (地圖入)
- 第四編 東洋歷史問答 (地圖入)
- 第五編 西洋歷史問答 (地圖入)
- 第六編 國語問答 (地圖入)
- 第七編 普通教育問答 (地圖入)
- 第八編 普通算術問答 (地圖入)
- 第九編 普通代數問答 (地圖入)
- 第十編 學校管理法問答 (地圖入)
- 第十一編 地理學問答 (地圖入)
- 第十二編 動物學問答 (地圖入)
- 第十三編 植物學問答 (地圖入)
- 第十四編 物理學問答 (地圖入)
- 第十五編 化學問答 (地圖入)
- 第十六編 生物學問答 (地圖入)
- 第十七編 礦物學問答 (地圖入)
- 第十八編 倫理學問答 (地圖入)
- 第十九編 英文學問答 (地圖入)
- 第二十編 國文學問答 (地圖入)
- 第二十一編 國文典問答 (地圖入)
- 第二十二編 國文史問答 (地圖入)
- 第二十三編 國文問答 (地圖入)

受驗者の海

寸珍美本 紙每二百頁 每編讀切 正價每編五錢 郵付二錢六分

獨修者無之二好伴侶